

は ん ざ ん ば る
平安山原A遺跡

— 桑江伊平地区原状回復事業に伴う発掘調査事業（平成22年度） —

2018（平成30）年 9月
沖縄県 北谷町教育委員会

は ん ざ ん ば る
平安山原A遺跡

— 桑江伊平地区原状回復事業に伴う発掘調査事業（平成22年度） —

2018（平成30）年 9月
沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

本報告書は、桑江伊平地区原状回復事業に係る埋蔵文化財発掘調査として、平成22年度に実施された平安山原A遺跡発掘調査についての成果をまとめたものです。

今回の報告対象となった区域は、米軍基地として使用されていた頃に土壤汚染が進行していました。基地返還時には原状回復義務により土壤改良等の工程を踏まねばならず、残念ながら通常の発掘調査を実施するという訳にはいきませんでした。しかし改良後の土壤には、大量の遺物が含まれていたため、これらを採取して整理したのが本書となります。

桑江伊平土地区画整理事業に係る平安山原A遺跡の本報告書は、すでに2冊発刊されています。いずれの報告書も、本遺跡が弥生時代に相当する貝塚時代後期から戦前に至るまで連綿と続く集落であり、かつ、考古学上非常に重要な成果が得られたことを物語っています。

今回は特に、グスク時代～近世及び戦前の遺物が多く採取されました。これまで報告されてきた内容を、さらに補完する資料であり、先史時代から現代に至る本町の歴史・文化についての文化財調査、地名調査、町史編纂の成果を結びつけ、裏付けるものであります。

このことは、町民はもとより多くの方々に本町の歴史や文化を実感し、理解する資料の一助となれば幸いです。さらに、本町においては、現在、町立博物館建設を進めており、開館された暁には、さらに活用され町民の心の豊かさと魅力あるまちづくりに繋がるものと考えております。

末尾になりましたが、様々なご指導やご助言、ご協力を賜りました関係各位に心からの感謝を申し上げます。

平成30年9月

北谷町教育委員会
教育長 川上 啓一

例言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平地区原状回復事業に伴い、平成22年度に実施した「平安山原A遺跡（油分地区）」発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図（昭和54年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本書に掲載した緯度、経度の平面直角座標はすべて世界測地系にもとづくものである。
3. 遺物の観察・同定等については、下記の方々にご協力いただいた。記して感謝申し上げる（五十音順）。
島袋 春美氏（元北谷町教育委員会）
清水 宗昭氏（別府大学非常勤講師）
4. 本報告書の編集は、北谷町教育委員会文化係の指示・監督の下、国際文化財株式会社 沖縄営業所が行った。執筆については両者で下記のように分担した。
第Ⅰ・Ⅱ章 太田 菜摘美（北谷町教育委員会）
第Ⅲ章 土岐 耕司（国際文化財株式会社）
第Ⅳ章 太田 菜摘美・土岐 耕司
5. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては、北谷町教育委員会が保管している。

報告書抄録

ふりがな	はんざんばる いせき							
書名	平安山原A遺跡							
副書名	桑江伊平地区原状回復事業に伴う発掘調査事業（平成22年度）							
巻次	－							
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編集者名	太田菜摘美・土岐耕司							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904－0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098－936－3159							
発行年月日	2018年（平成30年）9月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
はんざんばる いせき 平安山原A遺跡	おきなわけん 沖縄県 ちやたんちよう 北谷町 あざいへい 字伊平 こあざ 字小 はんざんばる 平安山原	473260		26° 19' 32"	127° 45' 23"	20100617 ～ 20101210	4,600	原状回復事業に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
はんざんばる いせき 平安山原A遺跡		近・現代 近世 グスク時代 貝塚後期	－		沖縄産陶器・瓦質土器・ 陶質土器・本土産陶磁器・ 染付・青磁・白磁・ その他の輸入陶磁器・ 褐釉陶器・類須恵器・土器・ 円盤状製品・簪・銭貨・ 煙管・滑石・硯・石器・ 貝製品		赤間石製硯が出土	
要約	<p>米軍基地キャンプ桑江北側返還地に所在する平安山原A遺跡（総面積：約11,700㎡）のうち、約4,600㎡において土壌汚染が確認された。強い油臭を伴っており、人体への悪影響が懸念されたことから、通常手法による発掘調査ではなく、重機によって取り除かれた土壌を改良の上、人力で遺物を採取するという手法を採った。</p> <p>当該地区は一部に戦前平安山集落を含んでおり、得られた遺物の多くは近現代に帰属するが、近世・グスク時代・貝塚時代後期の遺物も少なからず確認されている。この出土状況は、調査区が一部重複していた既刊『平安山原A遺跡』（2016）における報告内容に整合的であり、更に補完する成果である。</p> <p>特記される遺物として、背面に線刻を伴う赤間石製硯がある。これまで赤色頁岩とされてきたものに酷似しており、今後に対して有意な知見となった。</p>							

本文目次

はじめに

例 言

報告書抄録

巻首図版

第I章 調査経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	2
第II章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 自然環境	5
第3節 歴史的環境	6
第III章 調査の方法と成果	10
第1節 調査の方法	10
第2節 調査区の位置	10
第3節 出土遺物	12
第IV章 まとめ	45

参考文献

挿図・図版目次

第1図	北谷町の位置	5
第2図	キャンプ桑江北側地区の旧地形の復元状況	7
第3図	北谷町の位置と遺跡分布	8
第4図	HA ①～④地区と今回調査区	10
第5図	前回検出された戦前集落と今回調査区の位置関係	11
第6図	ボーリング調査から算出された土壌改良深度	11
第7図・図版1	沖縄産施釉陶器1	13
第8図・図版2	沖縄産施釉陶器2	14
第9図・図版3	沖縄産無釉陶器1	16
第10図・図版4	沖縄産無釉陶器2	17
第11図・図版5	沖縄産無釉陶器3	18
第12図・図版6	瓦質土器	19
第13図・図版7	陶質土器	20
第14図・図版8	本土産磁器1	20
第15図・図版9	本土産磁器2	21
第16図・図版10	本土産陶器1	22

第17図・図版11	本土産陶器2	23
第18図・図版12	染付1	25
第19図・図版13	染付2	26
第20図・図版14	青磁1	28
第21図・図版15	青磁2	29
第22図・図版16	白磁1	30
第23図・図版17	白磁2	31
第24図・図版18	その他の輸入陶磁器	31
第25図・図版19	褐釉陶器1	32
第26図・図版20	褐釉陶器2	33
第27図・図版21	褐釉陶器3	34
第28図・図版22	類須恵器	34
第29図・図版23	土器1	35
第30図・図版24	土器2	36
第31図・図版25	円盤状製品	37
第32図・図版26	簪	37
第33図・図版27	銭貨	38
第34図・図版28	煙管	39
第35図・図版29	滑石	39
第36図・図版30	硯	40
第37図・図版31	石器1	41
第38図・図版32	石器2	42
第39図・図版33	石器3	43
第40図・図版34	貝・貝製品1	43
第41図・図版35	貝・貝製品2	44

表目次

第1表	北谷町遺跡一覧	9	第15表	類須恵器観察一覧	34
第2表	集計対象となった遺物の内訳	12	第16表	土器観察一覧	35
第3表	平安山原A遺跡各地区における 主要遺物の出土点数	12	第17表	無孔円盤状製品の素材・部位別点数	36
第4表	沖縄産施釉陶器観察一覧	13	第18表	円盤状製品観察一覧	37
第5表	沖縄産無釉陶器観察一覧	15	第19表	簪観察一覧	38
第6表	瓦質土器観察一覧	18	第20表	銭貨観察一覧	38
第7表	陶質土器観察一覧	20	第21表	煙管観察一覧	38
第8表	本土産磁器観察一覧	20	第22表	滑石観察一覧	39
第9表	本土産陶器観察一覧	21	第23表	硯観察一覧	40
第10表	染付観察一覧	24	第24表	石器観察一覧	41
第11表	青磁観察一覧	27	第25表	貝・貝製品観察一覧	43
第12表	白磁観察一覧	30	第26表	赤間石製であることが疑われる出土硯一覧	45
第13表	その他の輸入陶磁器観察一覧	31	第27表	沖縄県内における滑石出土の報告状況	46
第14表	褐釉陶器観察一覧	32	第28表	北谷町における遺跡ごとの滑石出土状況	47



遺構面を保全しながらの汚染土壌撤去作業（北地区）



石灰を混ぜての土壌改良作業



作業ヤードに積まれた改良中の土壌



人力による遺物採取作業



採取された青磁片



赤間硯（表面）



赤間硯（裏面、「…間関」の線刻あり）

第 I 章 調査経緯・経過

第 1 節 調査に至る経緯

平安山原A遺跡は、平成 15 年 3 月に返還された在沖米軍基地「キャンプ桑江北側地区」に所在し、平成 7 年度から平成 9 年度にかけて行われた試掘調査^{註1}で発見され、平成 20 年度に上記調査の未実施箇所において実施された試掘調査^{註2}で遺跡の拡がりが確認された周知の埋蔵文化財である。貝塚時代後期から近現代の集落遺跡であり、遺跡の総面積は約 11,700 m²にわたる。

本書は、沖縄防衛局による汚染土壌の原状回復事業に伴って行われた文化財発掘調査成果をまとめたものである。油分地区以外の平安山原A遺跡の調査成果については、すでに北谷町教育委員会により調査報告書が刊行されており^{註3}、以下では平安山原A遺跡（油分地区）の発掘調査に至った経緯について記述する。

前述したが、北谷町教育委員会は平成 7 年度から平成 9 年度にかけて文化庁の補助を得てキャンプ桑江北側地区の返還に伴う試掘調査を実施しており、その結果、9 遺跡 6 遺物散布地（延べ 13ha）と周知の 2 遺跡を合わせた 11 遺跡を確認した。

返還以前からキャンプ桑江北側地区は、町の中核ゾーンとして職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を図る計画がなされていた。国道 58 号に東接する同地区は、国道よりも地盤が低く、大雨時に冠水が発生するという問題があったことから、盛土による造成工事が計画されたが、この盛土の造成高は一樣ではなく、埋蔵文化財に悪影響を及ぼす規模であったことから、平成 11 年 9 月から平成 12 年 10 月にかけて、沖縄県内の政府関係機関、沖縄県並びに北谷町で開催された「キャンプ桑江北側地区跡地利用支援関係機関連絡会議」等の会議検討を経て、同地区内の埋蔵文化財は 2 遺跡（伊礼原遺跡・千原遺跡）を除いて緊急発掘調査が行われることとなった。

平安山原A遺跡については、遺跡の規模や北谷町教育委員会の専門職員の体制等を考慮し、平成 19～23 年度にかけて計 5 回の分割調査が実施されることとなった。平成 19 年度に実施された発掘調査の際、隣接していた調査予定区から異臭が認められたため、平成 20 年度に沖縄防衛局が油分調査を実施したところ、ボーリング調査において当該地区から油分を含む汚染土壌（約 4,600 m³）が確認された。

沖縄防衛局は、これらの原状回復工事を行うため、平成 22 年 3 月 2 日に文化財保護法 94 条第 1 項に基づき発掘通知を北谷町教育委員会に提出。併せて、発掘調査実施の依頼文を提出した。前者を受けて町は沖縄県教育委員会に対して進達を行い、県は 3 月 11 日に周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、工事着手前に調査を実施するよう回答し、町は 3 月 15 日付けでこれを受領、同日町から防衛局へ通達した。また、発掘調査の依頼に対しては、北谷町教育委員会が実施主体となって当該事業を行うと 3 月 17 日に防衛局へ回答した。

これを受けて沖縄防衛局と北谷町は、3 月 31 日付で「桑江地区文化財発掘調査委託業務」の業務委託契約書を締結した（自：平成 22 年 3 月 31 日～至：平成 22 年 8 月 31 日。後に改定契約を行い、平成 22 年 12 月 25 日まで延長。）。調査対象地域が油分汚染土壌であることから発掘調査員の安全が危惧されたため、沖縄県教育庁文化課の指導を仰ぎ、沖縄県埋蔵文化財発掘調査基準の第 4 条第 1 項第 6 号の発掘調査における安全の確保（「発掘調査の実施に当たっては、人命尊重を第一とし、安全対策及び発掘調査作業現場の条件整備に必要な措置を十分講ずる。」）の基本方針に基づき、通常の人力掘削に代えて、油臭土壌改良工事の立会い及び遺物採取等により発掘調査を行い、発掘調査報告書を作成することとした。なお、発掘調査報告書作成とそれに伴う資料整理作業については事業費に含まれていないため、別年度で実施することとなった。

桑江北側地区では油分地区の調査以外にも発掘調査が並行して実施される予定であり、専門職員の事務負担量が著しく増大していたため、発掘調査に係る諸作業の軽減を図る目的で、発掘調査に係る安全管理、発掘作業員の手配等を民間業者に委託することとした。6 月 7 日に民間発注の為の入札を行い、株式会社アーキジオ沖縄（現：株式会社アーキジオ パシフィック支店）が落札した。その結果を受けて 6 月 17 日、株式会社アーキジオ沖縄と委託契約を締結し（自：平成 22 年 6 月 17 日～至：平成 22 年 8 月 31 日。後に改定契約を行い、平成 22 年 12 月 10 日まで延長。）、6 月 18 日に調査に着手した。

註 1 北谷町教育委員会 2005『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業』

註 2 北谷町教育委員会 2011『平安山原地区試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』

註 3 北谷町教育委員会 2016『平安山原A遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成 19・21・22・23 年度）』

第2節 調査体制

平安山原A遺跡（油分地区）は、現地調査を平成22年度に、資料整理及び報告書作成を平成29年度末から30年度にかけて実施した。各年度の調査体制は以下の通り。

発掘調査（平成22年度）

委託業務の契約手続きの詳細については、第1節を参照。

事業主体	教 育 長	比 嘉 秀 夫
事業総括	教 育 次 長	大 城 操
	社会教育課長	知 念 喜 忠
調査総括	文 化 係 長	嘉 陽 田 朝 栄
調査担当	主 任 主 事	松 原 哲 志
	同	山 城 安 生

委託業務 平安山原A遺跡（油分地区）埋蔵文化財発掘調査業務委託

受託者 株式会社アーキジオ沖縄

所 長	細 川 俊 之
現場代理人	田 中 昌 樹（主任調査員兼務）
調 査 員	新 川 睦

資料整理（平成29・30年度）

平成30年2月20日（平成29年度）に沖縄防衛局と資料整理報告書作成業務に関する委託契約を締結し、3月15日に町教育委員会が民間発注の為の入札を行い、国際文化財株式会社 沖縄営業所が落札したため、3月22日に委託契約を締結、同日付で着手届を受領。その後平成30年4月2日付（平成30年度）で管理技術者変更通知書の提出を受け、長尾聡子から土岐耕司に管理技術者を変更した。

事業主体	教 育 長	川 上 啓 一	（平成29・30年度）
事業総括	教 育 次 長	佐 久 本 盛 正	（平成29・30年度）
	社会教育課長	池 原 誠	（平成29・30年度）
調査総括	文 化 係 長	米 須 健	（平成29年度）
		與 那 覇 武	（平成30年度）
調査担当	主 任 主 事	太 田 菜 摘 美	（平成29・30年度）
	同	松 原 哲 志	（平成29・30年度）

委託業務 平安山原A遺跡（油分地区）埋蔵文化財調査報告書作成業務委託

受託者 国際文化財株式会社 沖縄営業所

所 長	森 下 賢 司
管理技術者	長 尾 聡 子
	土 岐 耕 司（平成30年4月2日付で変更）
調 査 員	加 藤 麻 理・利 屋 勉・土 橋 尚 起
	西 野 順 二・村 瀬 好 美・安 村 健

第3節 調査経過

発掘作業（平成22年度）

発掘調査の経過については、株式会社アーキジオ沖縄が作成した『業務日誌』等の成果品を参考にしてまとめた。

発掘調査は平成22年6月18日～12月10日にかけて実施した。今回の調査では掘削に伴う磁気探査、調査対象となる汚染土壌の掘削、汚染された土壌の改良作業、土壌改良済土の作業ヤードまでの運搬等については沖縄防衛局が委託

した民間業者（有限会社北勝建設）が実施し、掘削等の作業時にはアーキジオの調査員が立会いを行った。調査面積は約4,600 m²、土量は約1,255 m³である。

6月18日～8月10日までは作業員の確保や現場事務所設置、町教育委員会や北勝建設との打合せ等の調査に向けた準備作業を実施した。調査対象地区の磁気探査の立会いは8月11日から開始し、9月1日には終了を確認した。

8月30日からは遺物採取作業を行う作業ヤードの造成が開始され、立会いを実施したが、台風7号と台風9号の影響で8月31日と9月6日は作業を休止した。ヤードの造成作業は9月9日に終了した。

9月14日からは調査対象地区の掘削作業の立会いを開始した。調査対象土の掘削を行う際にはアーキジオの調査員が立会い、バックホウを使用して掘り下げを行った。なお、表土層については米軍による盛土であるため、遺物採取作業の対象としていない。この掘削に伴って遺構が確認された際には、アーキジオが写真記録作業等を実施しており、これらの遺構の詳細については、北谷町教育委員会が発行した『平安山原A遺跡』（2016）にまとめられている（平安山原A遺跡（油分地区）埋蔵文化財発掘調査業務委託（その2））。掘削作業と並行して土壌改良作業も実施されており、石灰等を混入・攪拌を行って土壌が改良された土については改良作業が終わった分を順次作業ヤードへ搬出した。

作業員を投入した遺物採取作業は10月1日から開始し、重機による採取土の敷き均し作業中や天候不順の場合には、出土遺物の洗浄作業を実施した。同月25日には油臭土分の遺物採取作業が終了したが、民間業者から油含土分の土壌改良には2週間程度必要と提示されたことを受けて、遺物採取等の現場作業を2週間休止することとした。その間発掘作業員については休みとし、アーキジオの調査員は現場巡視、未洗浄遺物の整理等を行った。11月9日に北勝建設から同月11日に約300 m²の土壌改良が終了する見込みとのことで、11日以降の遺物採取作業が可能との連絡を受ける。このため、発掘作業員による作業の再開を11月11日とした。11日の再開以降は遺物採取対象土の運搬、敷き均し作業の間は遺物洗浄作業を行い、同月16日に遺物採取作業を再開した。

12月10日には遺物採取作業、遺物洗浄作業を終了し、成果品の納品が行われた。採取された遺物は、標準的な遺物コンテナサイズで約79箱分であった。



写真1 遺物の洗浄作業

不発弾処理作業（平成22年度）

遺物採取作業に伴って不発弾の発見が相次いだ。ほとんどは小銃や機関銃の弾等であった。処理作業等の詳細についてはアーキジオが作成した『不発弾処理記録簿』を参考に以下にまとめる。

発見から処理までの大まかな流れとしては、発見後にアーキジオの現場代理人から町教育委員会担当に連絡があり、町教育委員会担当から町企画財政課の担当者に連絡。町企画財政課から警察へ連絡を行っており、発見時間が遅かった場合や町企画財政課の担当者が不在だった場合は警察への連絡が翌日になることもあった。

平成22年10月1日、計3発を発見。現場到着後、警察内部での検討の結果、危険性は低いと考えられたため、警察による不発弾回収が行われた。

同月7日、遺物採取作業に伴って計29発を発見。現場作業終了後、連絡を受けて到着した警察内で処理の仕方について



写真2 警察による不発弾確認作業



写真3 自衛隊による不発弾回収作業

て検討が行われた結果、数が多いため後日改めて処理を行うことになり、その間現状のまま保持しておくこととなった。

同月 8 日に計 10 発、13 日に 4 発を発見。現場で保存していた分も合わせた処理について沖縄警察署生活安全課から連絡があり、自衛隊の回収部隊による処理作業が実施されることとなる。回収部隊による確認の結果、合計 64 発が確認され、すべて回収された。生活安全課との打合せの結果、発見のたびに連絡するのではなく、発見された日の午後 3 時頃に生活安全課に連絡することとなった。

同月 14 日、計 3 発を発見。沖縄警察署に連絡、内部での調整の結果、そのまま回収されることとなった。

同月 15 日、計 11 発のほか、弾倉（弾内包）を 1 つ発見。警察官の到着後、処理方法について検討し、警察がすべて回収することとなった。

同月 18 日に 1 発を発見するが、発見時間が遅かったため町教育委員会に連絡の上、現場で適切な保存を行い、維持する。翌 19 日、警察に連絡し回収が行われた。

同月 22 日、25 日にそれぞれ 4 発、計 8 発を発見。その日のうちに警察が回収を行った。

11 月 16 日に計 2 発を発見。翌 17 日に警察に連絡したところ、暴発を防ぐ処理を行い自衛隊の定期回収が来るまで現場で保存することとなった。

同月 18 日、計 3 発を発見。翌 19 日にも計 2 発を発見。現場に到着した警察官が現場保存の処理を実施した。

同月 25 日、計 5 発を発見。連絡を受けた警察官が現場に到着し、警察内部での調整の結果、回収する旨を伝えられる。

12 月 2 日に 1 発を発見。翌 3 日、連絡を受けた警察官が現場に到着し、今回は回収せず、自衛隊の回収部隊が回収するまで現場で保存する旨を伝えられた。

同月 9 日、1 発を発見。翌 10 日に連絡を受けた警察官が現場に到着し、回収することとなった。

資料整理作業（平成 29 年度末～平成 30 年度）

出土遺物の整理作業は、平成 22 年度にアーキジオが実施した調査期間中の雨天時や重機による採取対象土の敷き均し作業中に遺物の洗浄・乾燥といった作業を行い、本格的な作業は資料整理報告書作成業務の委託を受けた国際文化財株式会社 沖縄営業所が平成 29 年度末から平成 30 年度にかけて実施した。

平成 30 年 3 月 22 日の契約締結後、初回打合せを実施の上、対象となる出土遺物の搬出を順次行った。受領した遺物の内容を確認後、あらかじめ仕分けられていた種類ごとの点数の集計を開始した。遺物実測・写真撮影等の作業は県外にある受注者作業所にて行い、6 月初旬にはこれらを完了した。各種実測図やそれに伴う文章・表等については、順次北谷町教育委員会の確認を受け、適宜修正・改変を行った。

7 月には印刷業者への入稿を開始し、必要な校正作業を行った上で、8 月には印刷・製本の工程に入った。本業務の契約工期は 9 月 15 日である。



写真 4 遺物実測作業

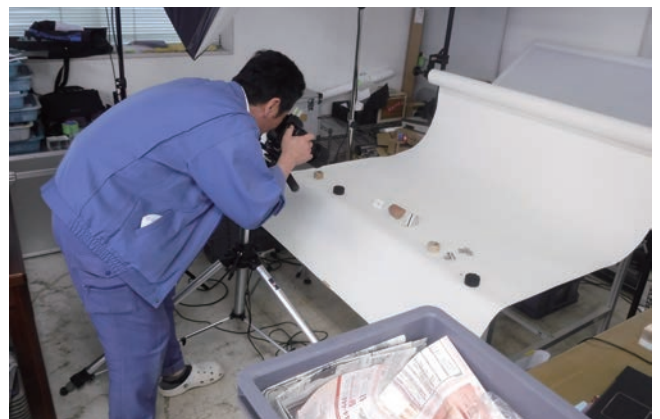


写真 5 遺物写真撮影

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

北谷町は沖縄島中部の東シナ海に面した西海岸側に所在し、県庁所在地である那覇市から北東約16kmに位置している。北に嘉手納町、東に沖縄市と北中城村、南に宜野湾市と接し、西に面する東シナ海の彼方には慶良間諸島が眺望される。町の総面積は13.93km²で、南北約6km、東西約4.3kmの長方形をなし、ほぼ中心(北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒)に町役場が位置する。

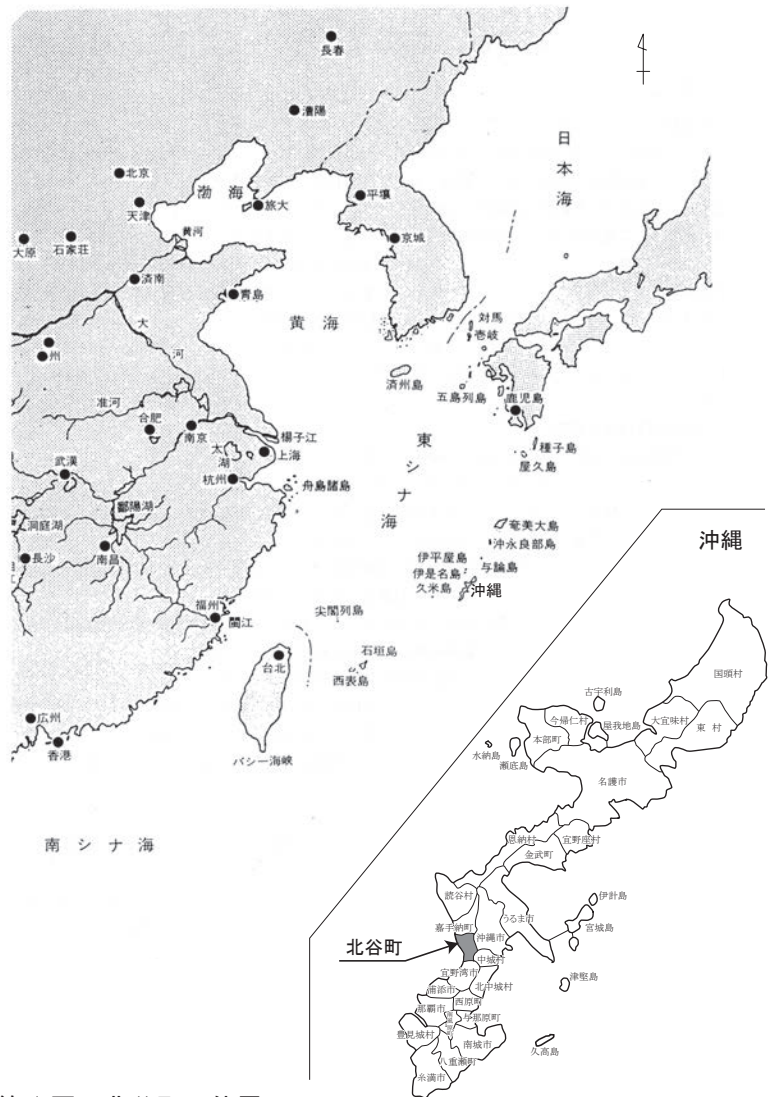
2018(平成30)年3月末時点の人口は約29,098人で、現在進められている桑江伊平土地区画整理事業開始前(平成15年12月末)の26,358人に比べ2,740人、率にして1.10%増となっている。今後も公有水面埋立地の利用や返還軍用地の跡地利用に伴って、一層の人口増加が見込まれる。

本町は米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が3番目に高い自治体であり、町総面積における軍用地の比率は52.3%を占める。そのため土地利用上大きな制約があり、丘陵台地からなる東部地域と、主に海岸埋立地からなる西部地域の両居住域は基地により分断されている。

産業は、西海岸地域を中心に第三次産業の割合が大きく今後の伸びも予測されている一方、第一次、第二次産業は減少傾向にある。現在は、都市との共生・交流を目指したフィッシャリーナ整備事業や自然海製塩事業など、地域特性を生かした新しい地場産業の創出に取り組んでいる。

交通網は、那覇市から本島北部へ延びる主要幹線道路の国道58号が西海岸側を縦断し、町域

北側より県道23号線、24号線、130号線がそれぞれ国道58号以東へ延び、概して交通の便に恵まれている。近年では、国道58号渋滞緩和のための道路拡幅や県道24号線のバイパス整備が進められている。



第1図 北谷町の位置

第2節 自然環境

本町の気候は亜熱帯海洋性に属し、四季を通して温暖である。年平均気温は23度程度で、冬の期間が極めて短い。年平均湿度は77%前後、年降水量は2,000から3,000ミリメートルと多雨で、特に5月中旬から6月下旬の梅雨期と8～10月の台風期に集中する。

本町の地形を概観すると、町の北西-南東方向に走る桑江断層を大きな境とし、東高西低の様相を呈している。東・南部では標高100m以上、100～50m、50～30mの段丘地形が見られ、侵食が進んだ台地は起伏に富んだ地形を成し、北部では洞穴やドリーネ、石灰岩堤、石灰岩丘等のカルスト地形が発達している。西部には低地及び海浜が見られ、海岸低地のほとんどは埋立地や人工ビーチとなっており僅かに自然海浜が残る。主な河川には、白比川、普天間川の二級河川があり、東シナ海へ向け西流している。

表層地質は、基盤の第三期中新世末から鮮新世の島尻層群を第四期更新世の琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている。琉球層群は非石灰質の国頭礫層と石灰質の琉球石灰岩層からなり、前者は沖縄本島北部、後者は中・南部に分布する。本町は国頭礫層の南限となり、基盤の影響を受けて酸性化した土壌(国頭マージ)

が確認される。水理地質は、基盤のシルト質粘土層が不透水層となり、これを不整合で覆う琉球石灰岩層中の砂質石灰岩が本町一帯に分布している。石灰岩層は多孔質で透水性がよく、帯水層となり不整合部の各所で湧出している。

植生は、沖縄島北部に生育するイタジイ・イジュ・ヤマモモ等と、中南部に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等が混生し、学術的にも貴重な地域となっている。森林は、嘉手納基地内やその周辺、庁舎北側の丘陵地、北谷城周辺、河川流域に比較的良好に残るも、その割合は町土の約7%と決して高くない。動物相は、良好な植生が残っている場所を中心に、鳥類4目9科14種、爬虫類1目4科6種、両生類1目3科3種、大型土壌動物14目1,411種の個体が確認されている。また、2000(平成12)年に行われた動物調査では、希少性の高い哺乳類のオリオオコウモリ、鳥類のミフウズラ、昆虫類のクロイワゼミ等を含む陸棲動物や、海域、汽水域、河川域で多様な水棲動物が確認されている。

第3節 歴史的環境

(1) 北谷町の歴史的環境

北谷町では、平成30年8月現在で56遺跡が確認されている。以下に本町における各時代の代表的な遺跡を挙げ、歴史的環境を概観する。

旧石器時代

現在、当該期の明確な遺跡は存在しない。1966年、多和田真淳によって桃原洞穴遺跡から発見された、約16,000年前のものと推測されていた化石人骨は、近年の研究で中世に属すると考えられている。1983年施行の桃原土地区画整理事業の際には鹿化石が3点発見されたが、現在は宅地と化している。

貝塚時代前期(縄文時代相当期)

本期に相当する遺跡には、伊礼原遺跡、砂辺貝塚、クマヤー洞穴遺跡などがある。現在本町最古とみられる遺跡は、桑江断層下標高2~4mの沖積地に立地する伊礼原遺跡である。同遺跡は、縄文海進ピーク時にあたる前1~2期(縄文時代早期~前期)の頃は海食崖付近の低湿地に、海退によって陸地化が進む前3期(同中期)以降は、1~2期の頃に無かった砂丘上に遺跡が形成される。一帯の砂丘は、前4期のほか続く後1期(弥生から古墳)にも侵食と再堆積を繰り返しており、地形の発達過程を良好に示す。低湿地からは滑石を含む曾畑式土器が出土し、九州との交流が窺える。

町北部に位置する前4~5期の砂辺貝塚は、標高33mの残丘カルストの台地上に住居跡を、崖下に貝塚を形成する。砂辺貝塚から南西に300m、標高7mの鍾乳洞内に前5期の墓域を形成するクマヤー洞穴遺跡があり、洞内からは50数体分の改葬人骨とともに副葬品が発見された。貝塚前期の段階で地形の発達過程や、遺跡の立地と性格が一様でないことが判る。

貝塚時代後期(弥生から平安時代並行期)

本期の遺跡はキャンプ桑江北側地区の標高3~5mに集中する。平安山や桑江の低地では砂丘や浜堤の発達に伴って後1期の遺跡が増加する。遺跡からは燃焼遺構や貝塚、土壇墓などが検出されるが、住居跡は認められない。後2期の終末からグスク時代の小堀原遺跡では、10~12世紀代の大麥・稲・アワや、カムイヤキ埋納土壇墓が発見されるなど、喜界島城久遺跡群との関連が注目される。その他、平安山原B遺跡からは10~14世紀に収まる可能性が高い風呂鍬が出土するなど、農耕を示唆する遺物が目立つ。また、小堀原遺跡に隣接する後兼久原遺跡からは、製鉄・鍛冶関連の遺物・遺構も検出されており、小堀原と共に次代の成立を考える上で重要な遺跡である。

グスク時代・古琉球

本町におけるグスク時代の代表的な遺跡に北谷城が挙げられる。北谷城は、町役場から南へ約1.3kmの石灰岩丘陵上に立地する本町で唯一残存するグスクである。発掘調査成果等から、グスクの所在する丘陵は貝塚時代後期後半から利用されており、14世紀後半から15世紀中頃に石垣が構築され、尚真王による中央集権政策が行われた16世紀前半には終焉を迎えたと推測される。北谷城主に関する明確な記録はなく、金満按司や大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったと伝えられているが伝承の域を出ない。「北谷」の文字は、嘉靖年間(1522~1566年)の兪姓大宗家家譜中に「北谷間切平安山地頭職」と見え、遅くとも16世紀半ばには存在していたようである。また、琉球国王が地方役人に給した辞令書(1577年)に「きたたんまきり」と見られることから、当時は北谷を「きたたん」と読んでいたようである。その後「きたたん」は「きちゃたん」から「ちちゃたん」へと変化し、現在の「ちゃたん」となる。なぜ「きたたん」というのか諸説あるが、定説には至っていない。

近世(1609~1879年)

1649年に作成された『絵図郷村帳』をみると、近世の北谷間切には、北谷、くわい(現在の桑江)、平安山、すなへ(砂辺)、野国、屋郎(屋良)、賀手納(嘉手納)、山内、あきな(安仁屋)の9つの村があったことが分かる。1660~1670年代には、

間切の分割・新設に伴って山内が越來間切に、あきなが宜野湾間切に割かれ、新たに玉代勢、伝道、伊礼、浜川、野里が誕生し、計12村となって近代まで引き継がれた。1700年代前半になると首里の士族層が地方へ下り、屋取（ヤードゥイ）として生活し始める。北谷は屋取が多い地域で、彼らは古集落と離れた未開地、概して高標高の地を開墾し集落を形成するが、急激な開墾により土砂流出が起きたことが下流域の伊礼原B遺跡で確認された。近世末期の1840年には、北谷沖にイギリス商船のインディアン・オーク号が座礁する事故が起こる。北谷間切の人々は同船の乗組員全員を救助・保護し、帰国の手助けをした。インディアン・オーク号座礁地では、当時の積み荷の一部が今も海底に残され、海底遺跡として位置付けられている。

近代・現代

1908(明治41)年に施行された島嶼町村制以後、北谷間切は北谷村(ムラ)となった。戦前は水田の広がる農村として栄えていたが先の大戦で焦土と化し、沖縄戦や戦後の米軍基地建設により地形は大きく改変された。米軍上陸直前に守備隊が建設した特攻艇秘匿壕は、北谷城が立地する丘陵北側に現在も残されている。戦後は村全域が米軍の軍事占領下に置かれ、中でも嘉手納基地の存在は村を南北に二分し行政執行に支障をきたす要因となった。これらを受け、1948(昭和23)年には北谷村(ソソ)と嘉手納村に分村し、1980(昭和55)年には北谷村から北谷町へと町制移行している。

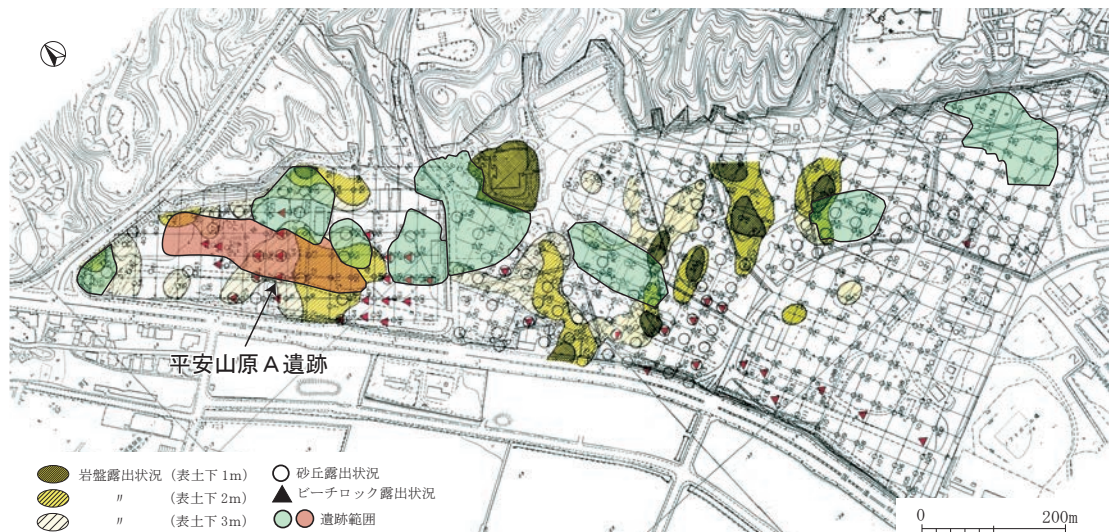
(2) 平安山原A遺跡周辺の歴史的環境

平安山原A遺跡の所在する東シナ海に面した沖積平野部の背後には、北から東にかけて標高約30m前後の海岸段丘の丘陵部が連なり、その丘陵の間を河川(ナガサ川)が流れている。丘陵の麓から沖積平野部にかけての帯には平安山原A遺跡のほか、千原遺跡、平安山原B遺跡、平安山原C遺跡、伊礼原遺跡、伊礼原D遺跡、伊礼原E遺跡、小堀原遺跡、後兼久原遺跡など多くの遺跡が確認されており、遺跡が集中する様子がみられた。

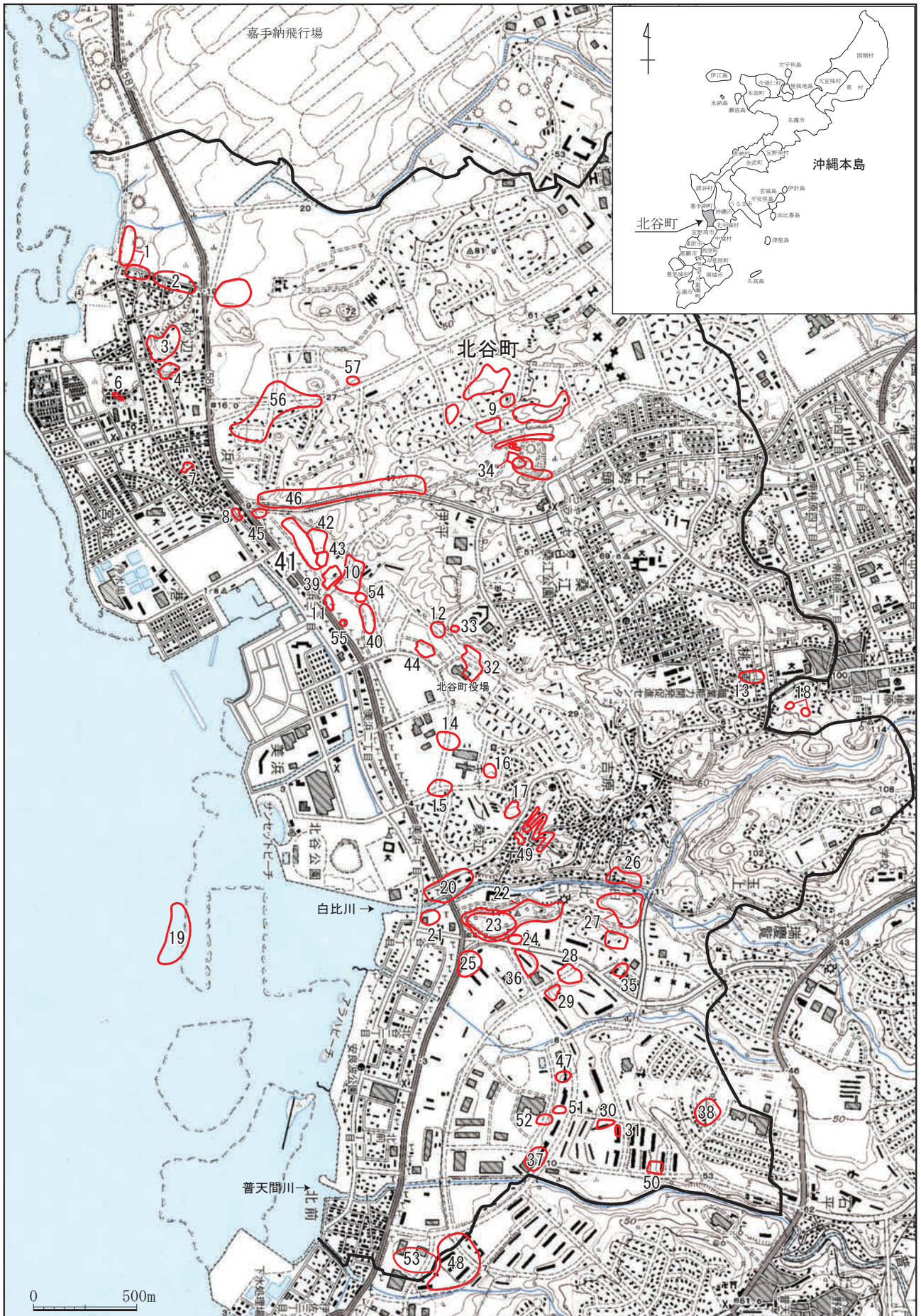
本遺跡は標高3~5mの沖積平野部の砂丘地に立地し、東側には平安山原B遺跡、南東側には平安山原C遺跡が隣接して所在する。当該地は戦後米軍による削平等が行われており、一見すると低平な平野部である。しかし平成7~9年度に実施した試掘調査の結果、広範囲に石灰岩の岩塊やビーチロックが露頭する状況が確認され、起伏に富んだ地形であったことが判った。

当該地には戦前まで平安山集落が所在しており、南側はナガサ川を境として伊礼集落、北西側は県道(現国道58号)をはさみ浜川集落と隣接していた。平安山集落には村落祭祀を主催する女性神役である「平安山ノロ」の屋敷があったと記録されている。平安山ノロについては『琉球国由来記』(1713年)に記述があり、屋号ヌンドゥルチ(祝女殿内)が平安山ノロで、浜川・砂辺・伊礼・桑江・平安山の5集落の祭祀を管轄していた。平安山ノロによる祭祀は1944(昭和19)年まで行われていた。

平成19~23年度に実施された発掘調査で得られた成果から、当該地には貝塚時代後期から近代まで継続的に人々が住み続けたことが判っているが、近代以降の攪乱の影響を受けてそれ以前の遺物包含層については把握できなかった。しかし、各時期の出土遺物の平面分布から貝塚時代後期から近代までの時期的変遷を確認することができた。戦前まで存続していた平安山集落については戦後米軍の基地接收後、米軍の基地造成によって地中に埋没していたが、発掘調査により平安山祝女殿内及びその周辺の屋敷等についても明瞭な痕跡が確認できたほか、当時集落で使用されていたとみられる沖縄産陶器など多くの遺物が出土し、当時の集落の様子が明らかになった。



第2図 キャンプ桑江北側地区の旧地形の復元状況



第3図 北谷町の位置と遺跡分布（北谷町地形図 2万5千分の1に加筆）

第1表 北谷町遺跡一覧

2018年8月現在

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	貝塚後期	宇砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前IV期～近世	宇砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前IV期～グスク	宇砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	宇砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	貝塚前V期	宇砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	貝塚前II期～戦前	宇砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんぼるいわやま)遺物散布地	貝塚前V期	宇浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	宇浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼぐん)	近世	宇上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	貝塚前I期～戦前	宇伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚I～V期・晩期・近世・戦前	宇伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとうん)遺物散布地	グスク～近世	宇桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	宇吉原栄口原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	宇桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	宇桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる)古墓	近世	宇桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	宇桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	中世か	宇吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座礁地	近世	宇北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	宇吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ)河口遺物散布地	貝塚前II期	宇北谷西表原
22	北谷城(ちやたんぐすく)遺跡群	貝塚後期末～グスク	宇大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	宇大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	宇大村城原
25	北谷番所址	近世	宇北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちぬまたばる)遺物散布地	グスク	宇吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	宇大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	貝塚後期末～グスク	宇大村玉代勢原
29	長老山(ちやうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	宇大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる)A遺跡	グスク	宇北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前V期	宇北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばる)遺跡	グスク	宇桑江後兼久原・宇桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	宇桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いれいーむいばる)遺跡	グスク	宇上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる)遺跡	グスク～近世	宇大村玉代勢原
36	塩川原(しーがーばる)遺跡	グスク	宇北谷塩川原
37	稲干原(んにふしばる)遺跡	貝塚後期	宇北前稲干原
38	横嵩原(よこたけばる)遺跡	グスク	宇北前横嵩原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	宇伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前II期～近世	宇伊平伊礼原
41	平安山原(ほんざんばる)A遺跡	貝塚後期～近世	宇伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	宇伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	宇伊平平安山原
44	小堀原(くむいばる)遺跡	貝塚後期～近世	宇桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク～近世	宇伊平千原
46	大作原(うふさくばる)古墓群	貝塚後期・近世	宇伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばる)遺跡	貝塚前V期	宇北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる)第2遺跡	貝塚前I期～近世	宇北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる)古墓群	近世	宇吉原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	宇北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	宇北谷大当原
52	高畔原(たかぶしばる)水田跡	近世～戦前	宇北谷高畔原
53	安仁屋原(あにやばる)遺跡	グスク～近世	宇北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前III期～貝塚後期	宇伊平伊礼原
55	蔵森(くらんもー)	貝塚時代後期～戦後	宇伊平伊礼原
56	平安山又上集落跡	戦前	宇浜川
57	下勢頭集落跡	戦前	宇下勢頭

註：時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」

*番号は第3図と一致

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

第Ⅰ章で述べた通り、今回の対象区域は油分に汚染されており、通常の発掘調査では人体へ悪影響を及ぼす可能性が高かったため、以下のような作業手順を踏んだ。

- ① 汚染が確認されている深度までの土壌を重機により掘り上げ、石灰等を散布し、攪拌する。
- ② 油分が揮発するように十分に曝気する。
- ③ 油臭等がなくなったことを確認後、人力にて土壌に含まれている遺物を採取する。

この結果、遺物コンテナ79箱という多量の遺物を採取することができた。しかし、他の工事も並行して行われている用地内においては、十分な作業ヤードが確保できず、各遺物の出土位置情報（平面位置や深度）を得ることはできなかった。そのため今回の出土遺物は全て「平成22年度平安山原A遺跡（油分地区）」という属性で一括されることとなった。

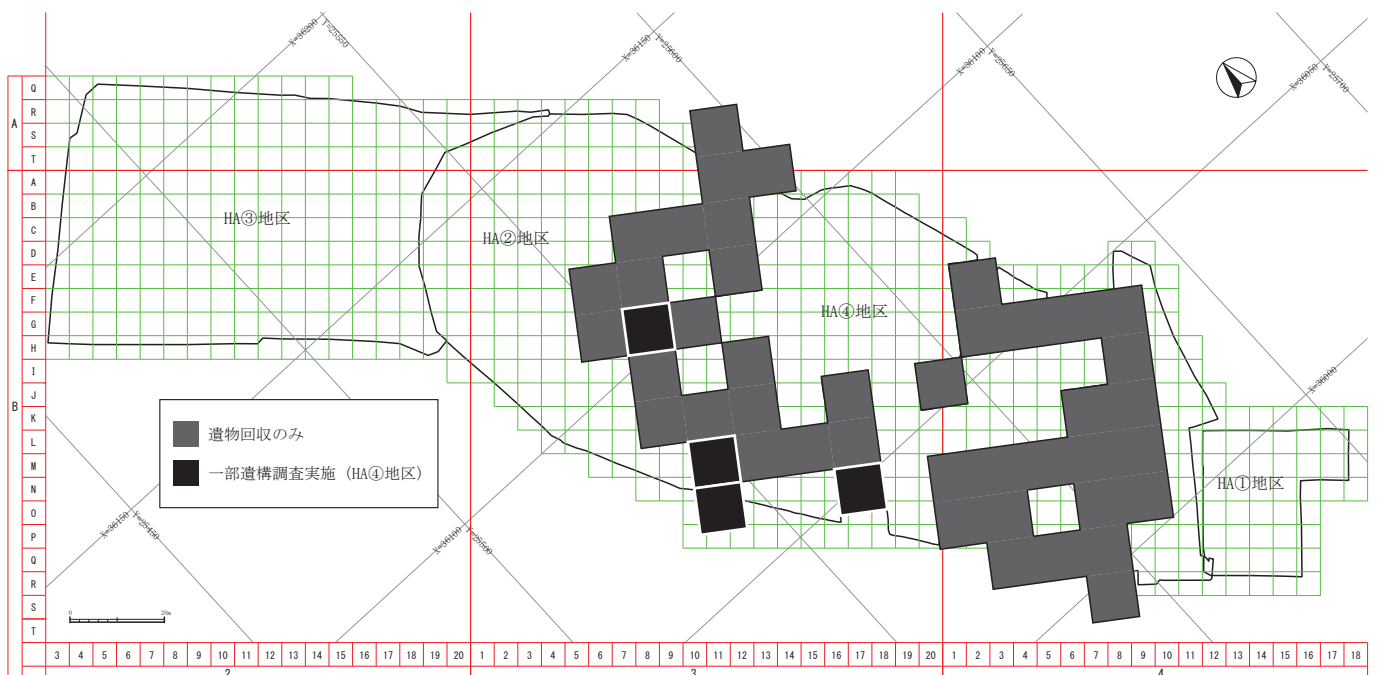
得られた遺物は、現地にて水洗を行ったが、改良材である石灰のこびり付きが強いものも多かった。遺物が欠損する可能性を考慮して、無理に石灰を削ぎ落とさずに留めたため、遺物観察にも若干の支障が生じている。

こうして得られた出土遺物は、北谷町教育委員会文化係の職員による分類・選別がなされ、36箱が報告対象の遺物として抽出された。この段階で近代瓦や自然貝は集計対象から除外されている。更に、この36箱の中から実測対象遺物が再抽出され、これらの数量を前提として報告書作成業務が発注された。

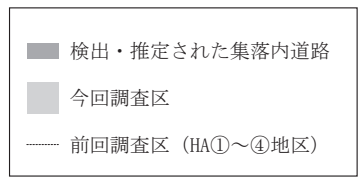
第2節 調査区の位置

今回の対象区域は、既刊『平安山原A遺跡』（2016）におけるHA④地区を挟み込むように、隣接或いは重複している（第4図）。北西側一帯は、戦前の平安山集落の居住地（屋号「祝女殿内小」・「西大屋小」・「東大屋小」・「名嘉座」・「照屋先生」）であることが分かっている（第5図）。また、それ以前、グスク時代後半～近世の遺物も多く得られていた区域でもある。平安山原A遺跡全体としての各期の変遷については、前掲の『平安山原A遺跡』（2016）の第Ⅴ章第3節に詳しいが、今回得られた多量の遺物がこの変遷想定を補強するものになるのかが、本書における主目的の1つとなる。

また第6図においては、重機による掘り上げ対象となった汚染土壌の現地盤からの深度が、箇所によって異なることを示した。事前のボーリング調査の結果に基づいて算出された数値であり、掘削作業はこの数値に沿って実施されている。

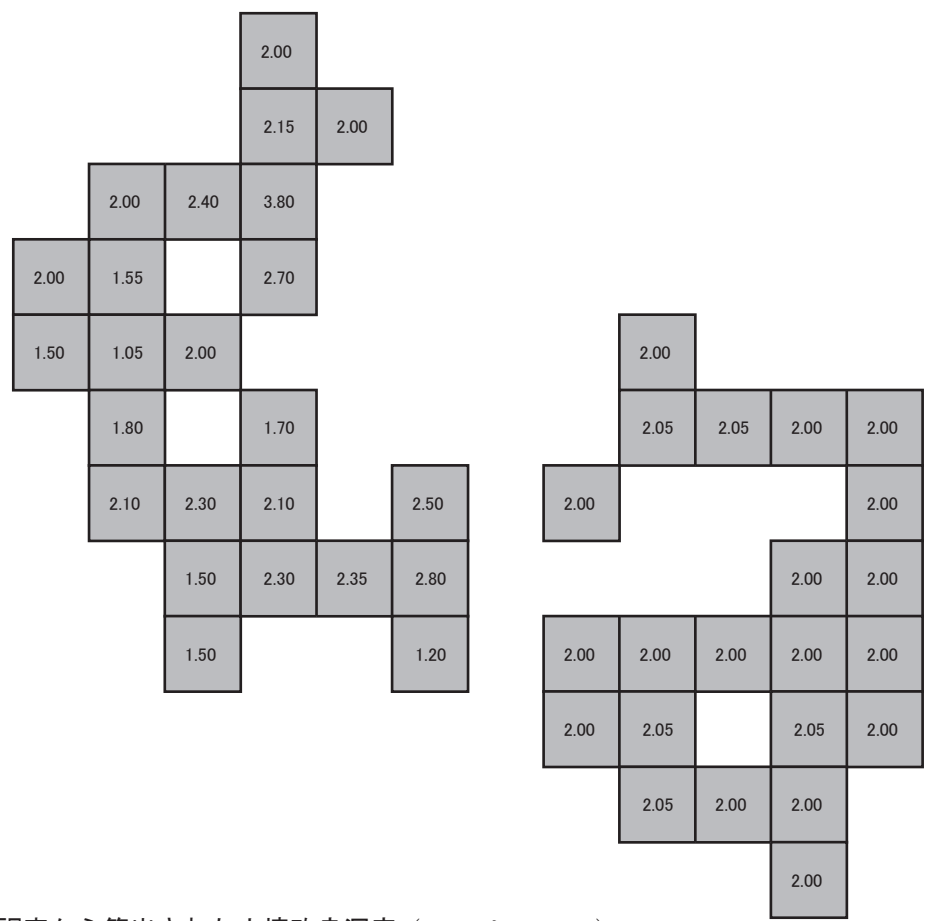


第4図 HA①～④地区と今回調査区



平安山 屋号地図 『北谷町の地名』(2006 北谷町教委) より ※遺構図との方位は異なる

第 5 図 前回検出された戦前集落と今回調査区の位置関係 (S=1/1600)



第 6 図 ボーリング調査から算出された土壌改良深度 (1マスは10×10m)

第3節 出土遺物

今回の集計対象として選抜された遺物の総点数は9,242点を数える(第2表)。これは今回区域と平面的に一部重複し、かつ本調査が実施されたHA④地区で報告された遺物点数を大きく凌駕している。近世・近代を主体とした遺物群、特に沖縄産陶器の多さがこの結果をもたらしているが、遺跡の上層部分が広く汚染されており、今回の遺物回収作業の対象となったことに起因している。

第2表 集計対象となった遺物の内訳

遺物	土器	類 須恵器	白磁	青磁	褐釉 陶器	染付	その他 輸入 陶磁器	本土産 陶磁器	沖縄産 陶器	陶質 土器	瓦質 土器	不明 焼物	タイル	磚子	小計
点数	191	3	167	664	354	554	4	2002	4315	364	21	79	16	35	8769
遺物	石器	石製品	石材 礫	軽石	貝製品	簪	銭貨	煙管	滑石	円盤状 製品	硯	ガラス	鉄片	その他	小計
点数	37	2	137	33	2	1	2	4	2	64	8	52	2	127	473
合計															9242

また第3表では、平安山原A遺跡の各地区における主要器種の点数比較を示した。今回調査区における出土傾向は、古い時期の器種(土器・青磁・褐釉陶器)については、調査区が重複するHA④地区に類似しているが、近世以降の器種になると、HA④地区の出土点数を大きく超えていることがよく分かる。

第3表 平安山原A遺跡各地区における主要遺物の出土点数

遺物 地区	土器	白磁	青磁	褐釉陶器	染付	本土産 陶磁器	沖縄産 陶器	陶質土器
HA①	188	3	24	3	9	1	7	
HA②	1296	577	1041	606	1303	4612	11754	2078
HA③	2142	324	532	531	857	3431	11065	1575
HA④	430	161	1205	632	338	351	1305	118
今回	191	167	664	354	554	2002	4315	364

(1) 沖縄産施釉陶器

総数988点の資料が得られた。部位別には、口縁部～底部が12点、口縁部片が140点、胴部片が563点、底部片が273点となる。これらのうち19点を図示・掲載した。

図1～4は碗類である。いずれも白化粧の後に透明釉を施すが、図1の白化粧は内面のみとなっている。図2にはイチンで花文が描かれ、呉須の垂れ方向からするとすぐに伏せて置かれたことが分かる。畳付けの釉剥ぎは粗っぽい。図5・6は皿である。図5は小型の皿で、呉須で3重の圏線が引かれる。内底の圏線間は蛇の目釉剥ぎされる。図6は鉄釉で文様が描かれるが、その上から自然釉がかかっている。胎土にやや黒味を帯びることから、本土産である可能性も残る。図7は肩が強く屈曲する、蓋を伴う容器である。外面は紺色釉、内面は透明釉が施され、蓋の受け部のみ露胎する。酒器と判断した。図8は鍋で、屈曲・外反した口縁内面が釉剥ぎされる。図9・10は蓋である。図9は外面(上面)に黒釉が施され、内面(下面)が露胎する。撮(つまみ)があったかは分からないが、油壺等に伴う蓋であると考えられる。図10は急須の蓋で、外面は白化粧の後に透明釉、内面は白化粧のみとなっている。図11～14は火炉・香炉類である。図11～13は筒形の火炉で、いずれも腰付近より下が露胎する。また、図11のみ内面にも白化粧を施す。図12は三島手の文様をもつ。トビガンナで抉られた器面に白土で象嵌している。図14は香炉で、内面に白化粧を施す。破断面の観察から、紺色釉と深緑色釉が重なっていることが分かった。図15～18は瓶で、図15・16・18は内面にも飴色系の施釉が認められた。図15はドーム形の脚と龍型(?)の耳をもつ。図16は上げ底状となり、底面外縁が着底部をなしている。破断面の観察から耳があったと考えられる。図17は口縁部資料で、緑色釉が施された後、縦方

向に青緑色が筆塗りされている。図 18 は高台を持ち、畳付け及びその周辺が露胎する。 図 19 は飴釉を施した後に、線彫りと釉剥ぎによって施釉部を浮文化している。大正焼と呼ばれる類であろうか。

第 4 表 沖縄産施釉陶器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	素地	実測 番号
第 7 図・ 図版 1	1	碗	口	12.6 - -	口縁外反。外面：透明釉、呉須で草花文。内面～口唇：白化粧、透明釉。	灰白色	実 165
	2	碗	口～底	14.8 6.9 6.7	口縁外反。白化粧→透明釉。外面：イッチン（花文、黄+呉須）→伏せ。内底：蛇の目釉剥ぎ。畳付け：釉剥ぎ。	橙色	実 179
	3	小碗	底	- - 3.9	白化粧→透明釉。外面：呉須で草花文。畳付け：釉剥ぎ。	灰白色	実 155
	4	小碗	口～底	8.6 4.4 3.6	白化粧→透明釉。内底：蛇の目釉剥ぎ。畳付け：釉剥ぎ。	にぶい黄橙色	実 190
第 8 図・ 図版 2	5	皿	口～底	9.6 2.3 3.9	白化粧→透明釉。内面：呉須で圏線。内底：蛇の目釉剥ぎ。畳付け：釉剥ぎ。腰に目痕。	灰色	実 163
	6	皿	口	- - -	内面：黒釉で草花文？ 内外面とも自然釉顕著。	灰色	実 168 実 169
	7	酒器	口～肩	5.7 - -	肩部屈曲。肩部径 11.6cm。外面：紺色釉。内面：透明釉。蓋受部：露胎。	灰色	実 167
	8	鍋	口	16.6 - -	口縁外反。内外面：飴釉。口縁内面釉剥ぎ。轆轤痕顕著。	灰色	実 164
	9	蓋	口	12.1 - 8.5	外面：黒釉。内面：露胎。石灰付着が激しい。	にぶい橙色	実 162
	10	蓋	口～撮	6.4 3.1 4.4	撮径 2.0cm。外面：白化粧→透明釉、線彫（円・三角）→呉須。内面：白化粧。穿孔内に透明釉（内面にはみ出す）。	にぶい黄橙色	実 189
	11	火取	底	- - 6.8	筒形。腰径 10.0cm。全面：白化粧（高台内はひび割れ・剥落）。外面：腰上まで透明釉、呉須掛け。	灰白色	実 160
	12	火取	底	- - 7.7	筒形。腰径 11.0cm。外面：灰釉・三島手（トビガンナ・圏線を白土で象嵌）。内面：露胎・轆轤ナデ。腰以下露胎。低高台。	青灰色	実 158
	13	火取	底	- - 6.5	筒形。腰径 9.4cm。外面：飴釉・線彫（縦・横）。内面：露胎・轆轤ナデ。高台周辺露胎。	にぶい黄橙色	実 122
	14	香炉	頸～肩	- - -	最大径 12.0cm。外面：紺色釉→深緑色釉。内面：白化粧（無釉）。	にぶい黄橙色	実 81
	15	瓶	口～底	8.0 16.6 7.7	ラッパ状口縁。外面：白化粧→透明釉、線彫圏線（肩・胴・脚に各 2 条）→呉須。内面：飴色釉→頸部半ばから上位に白化粧→透明釉、口縁内側に呉須。耳：龍型？ 呉須。畳付け：釉剥ぎ。	にぶい黄橙色	実 173
	16	瓶	肩～底	- - 8.2	上げ底状。外面：白化粧→透明釉、呉須で草花文。内面：黒色釉→頸部下端まで白化粧→透明釉。耳：破損？ 畳付け：釉剥ぎ。	にぶい黄橙色	実 156 他 3 点
	17	瓶	口	6.9 - -	ラッパ状口縁。外面：緑色釉→青緑色釉を筆塗り。内面：飴色釉→頸部半ばまで緑色釉。	にぶい橙色	実 166
	18	瓶	頸～底	- - 5.7	外面：腰まで飴釉。内面：頸部半ばまで飴釉。耳：破損。畳付け周辺露胎（高台内は施釉）。	灰白色	実 172
	19	不明	胴	- - -	外面：飴釉→線彫・釉剥ぎによる浮文化、釉剥ぎ部に細い工具痕。内面：飴釉。大正焼か。	にぶい黄橙色	実 78



第 7 図・図版 1 沖縄産施釉陶器 1 (S=2/5)



第8図・図版2 沖縄産施釉陶器2 (S=2/5)

(2) 沖縄産無釉陶器

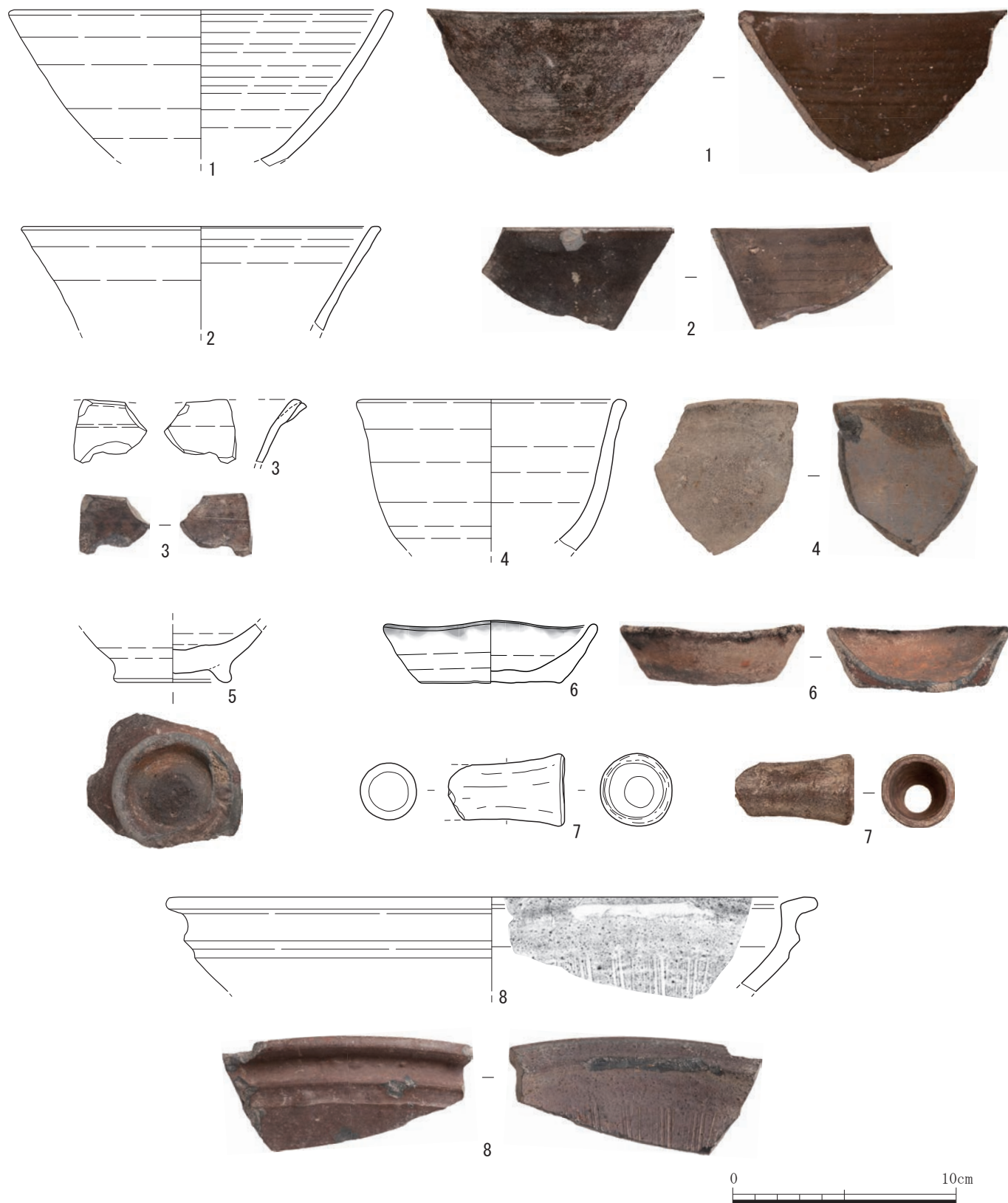
総数 3,327 点の資料が得られた。部位別には、口縁部～底部が 1 点、口縁部片が 489 点、胴部片が 2,623 点、底部片が 214 点となる。これらのうち 24 点を図示・掲載した。

図 1～5 は碗類である。図 2・3 は同一個体と思われ、薄手で外側に開きながら立ち上がる器形である。図 3 の口縁には歪みがあり、片口状となる可能性もある。図 4 は厚手でずんぐりとした質感である。図 5 は底部資料で、外側に開く付高台をもつ。図 6 は灯明皿で、口縁の内外に煤状炭化物が付着している。図 7 は急須の把手と考えられる。図 8～13 は播鉢で、黒色系の釉（マンガン釉か）がかかるものもある。図 8・9 は口縁部資料で、図 9 の内面には黒色の釉がかかる。図 10 の外底面には「X」を重ねたような線刻が残る。窯記号であろうか。図 11～13 は櫛目の残る胴部資

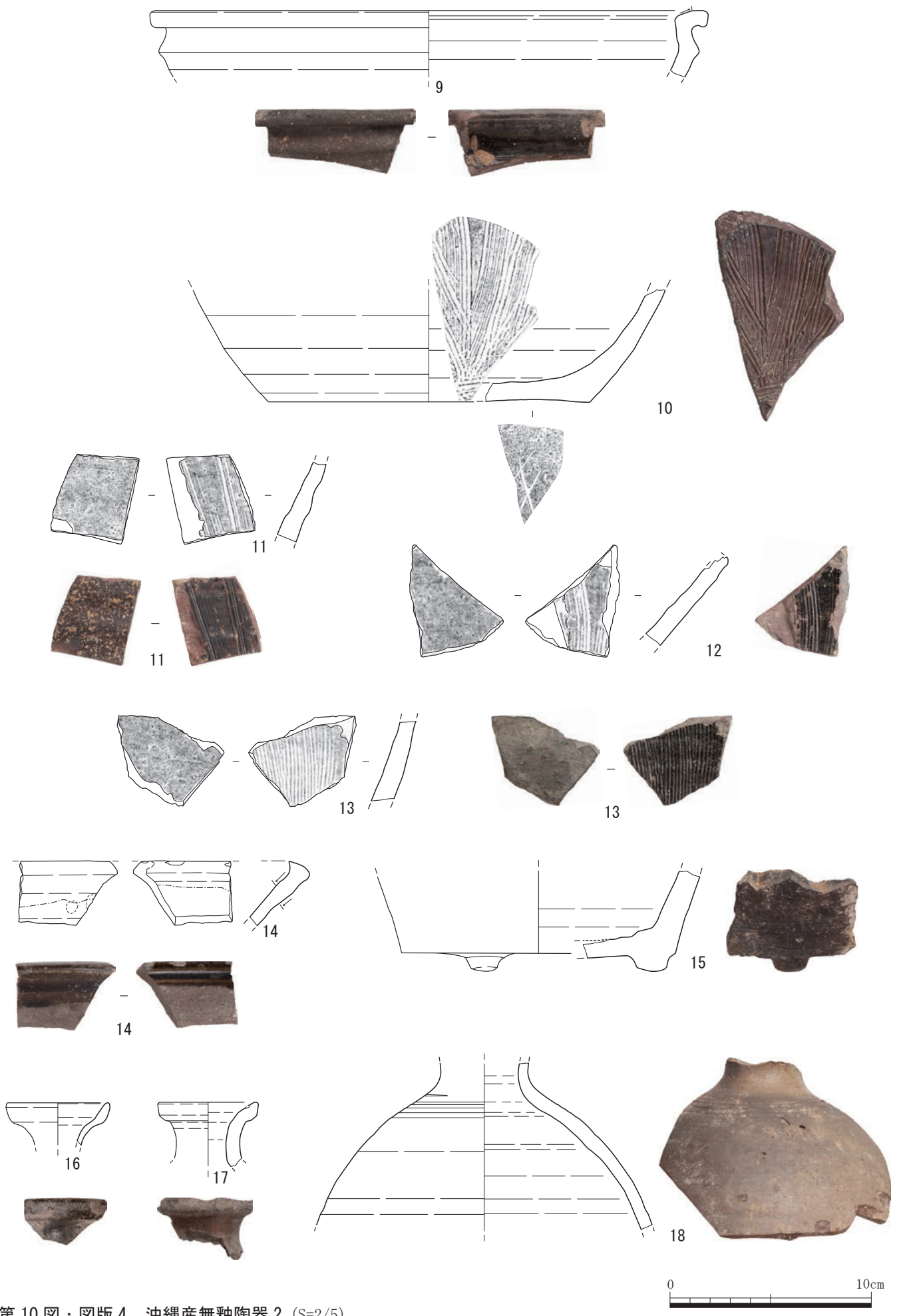
第 5 表 沖縄産無釉陶器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	素地	実測 番号
第 9 図・ 図版 3	1	碗	口	17.2 -	内外面轆轤ナデ。外面への石灰付着が激しい。	暗赤褐色 白色粒	実 72
	2	碗	口	16.1 -	内外面轆轤ナデ。内外面ともに煤状炭化物が付着。図 3 と同一個体で片口になるか。	灰赤色 白色粒他	実 86
	3	碗	口	- -	内外面轆轤ナデ。内外面ともに煤状炭化物が付着。口縁部に歪みあり。図 2 と同一個体で片口になるか。	赤灰色	実 125
	4	碗	口	12.1 -	内外面轆轤ナデ。外面と口縁内面に自然釉？	灰色	実 123
	5	碗	底	- 5.3	内外面轆轤ナデ。内底僅かに窪む。付高台。	灰赤色	実 114
	6	皿	口～底	9.4 2.6 6.4	内外面轆轤ナデ。口唇に煤状炭化物付着。灯明皿。	青灰色とにぶい赤褐色のサンド 白色粒	実 88
	7	急須	把手	- -	最大径 3.2cm。外面刷毛目→ナデ。	赤褐色	実 79
第 10 図・ 図版 4	8	播鉢	口	29.2 -	逆 L 字口縁の下に 2 条の稜。内外面轆轤ナデ。櫛目は 6 本 1.5cm 幅が 1 単位。	灰色と灰赤色のサンド	実 132
	9	播鉢	口	27.7 -	逆 L 字口縁の下に 1 条の稜。稜の下は僅かに窪む。内外面轆轤ナデ。内面に黒色釉。図 12 と同一個体か。	暗赤色 白色粒	実 117
	10	播鉢	底	- 16.0	内外面轆轤ナデ。櫛目は 7 本 1.6cm 幅が 1 単位。外底面に線刻。	暗赤色	実 130
	11	播鉢	胴	- -	内外面轆轤ナデ。櫛目は 7 本 1.2cm 幅が 1 単位。外面自然釉。内面黒色釉。外面は器面の凹凸が大きい。	灰赤色 白色粒	実 134
	12	播鉢	胴	- -	内外面轆轤ナデ。内面黒色釉。図 9 と同一個体か。	灰赤色 白色粒	実 133
	13	播鉢	胴	- -	内外面轆轤ナデ。内面黒色釉。櫛目は密。	赤灰色 白色粒	実 135
	14	鉢	口	- -	口縁が内側に突き出る。内外面轆轤ナデ。外面に押さえ痕。口縁内外面に黒色釉。	赤褐色 白色粒	実 124
	15	火炉	底	- 13.5	内外面粗いナデ。径 1.9cm 高さ 0.7cm の足残存。	青灰色と灰赤色のサンド	実 110
	16	瓶	口	5.2 -	口縁が玉縁状に肥厚。内外面自然釉。	赤灰色	実 95
第 11 図・ 図版 5	17	瓶	口	5.0 -	口縁が玉縁状に肥厚。内外面轆轤ナデ。口唇部の欠け激しい。	灰色と灰赤色のサンド	実 120
	18	瓶	頸～胴	- -	内外面轆轤ナデ。頸部下に沈線状の工具痕（4 条）。内面は素地の色に近い。	にぶい赤褐色 白色粒	実 107
	19	壺	口	9.0 -	口縁を折り返して玉縁状に肥厚。内面に灰の付着が顕著。	暗赤褐色	実 113
	20	壺	口	11.2 -	口縁が玉縁状に肥厚。内外面轆轤ナデ。内外面部分的に黒色釉。	灰赤色	実 116
	21	壺	口	8.1 -	口縁が外側やや上方に張り出す。頸部下端の屈曲明瞭。頸部直下に 6 条 + α の櫛目波状文。	青灰色とにぶい赤褐色のサンド	実 73
	22	壺	口	9.6 -	口縁が外側やや上方に折り曲がる。内外面轆轤ナデ。	にぶい赤褐色	実 115
	23	壺	口	14.0 -	口縁が外側やや上方に折り曲がる。内外面轆轤ナデ。	にぶい赤褐色 白色粒	実 112
	24	壺	胴	- -	内面横ナデ・指押さえ痕。横耳の下に 2 条のヘラ描き沈線。	暗赤褐色	実 106

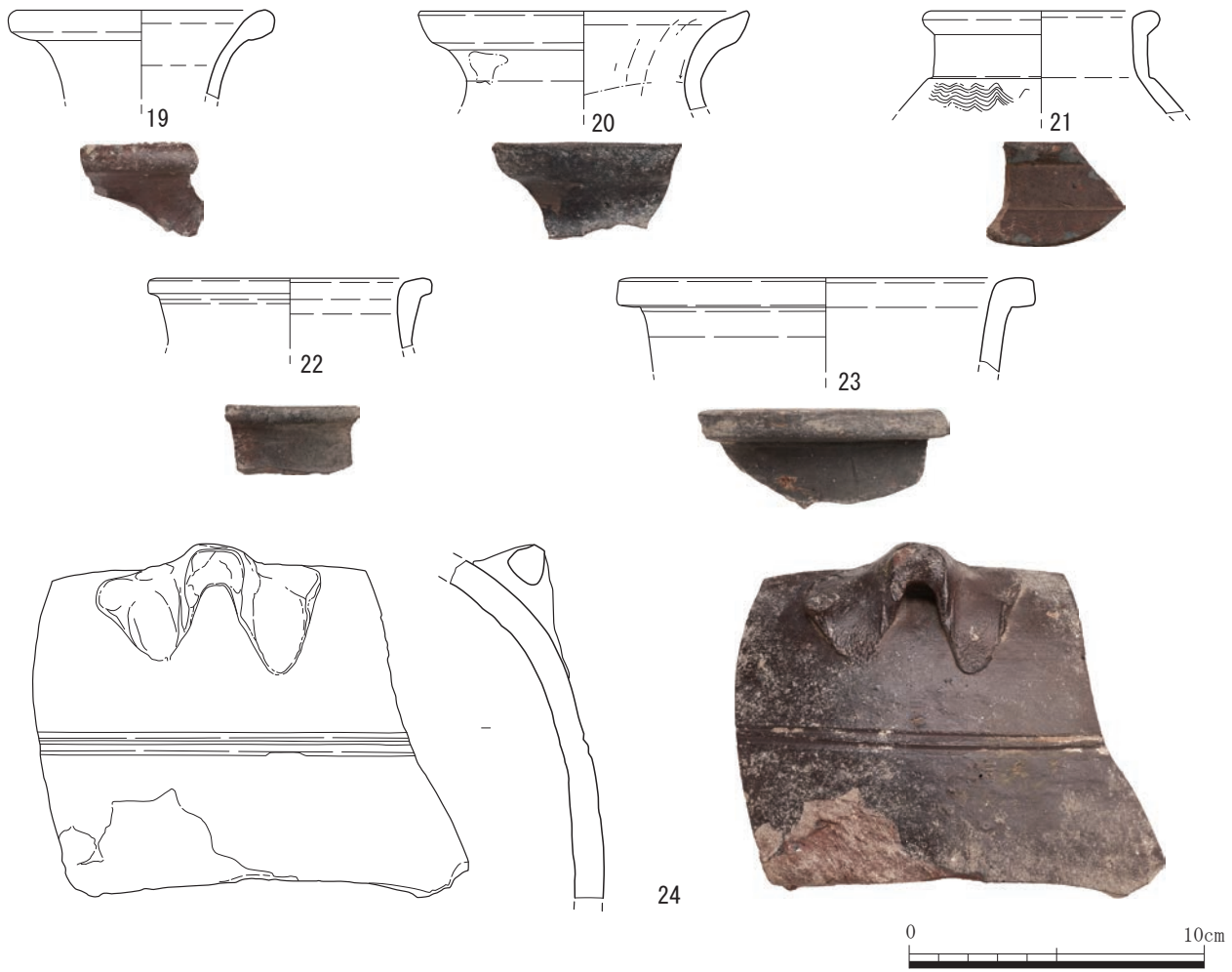
料で、いずれも内面に黒色の釉がかかる。図 11 は外面にも自然釉がかかり、器面の凹凸が大きい。楕目の隙間もあることから、古手の資料である可能性がある。 図 14 は鉢とした。口縁が内側に突き出る形状は、薩摩焼を模倣したものであろうか。口縁内外面にのみ、黒色釉が厚く施される。 図 15 火炉の底部である。内外面とも器面の調整が粗い。足が 1 つ残存していた。 図 16 ~ 18 は瓶である。口縁部資料である図 16・17 は、いずれも玉縁状に肥厚する。図 18 の肩には、沈線状の工具痕が残る。 図 19 ~ 24 は壺。口縁部形態には、肥厚するもの、折れ曲がるもの、その中間のものが認められた。図 21 の肩には、楕目波状文が描かれる。図 24 は大型壺の胴部片で、リボン状の耳が取り付けられている。取り付けの際の痕跡として、内面に指押さえの痕跡が観察された。



第 9 図・図版 3 沖縄産無釉陶器 1 (S=2/5)



第10図・図版4 沖縄産無釉陶器2 (S=2/5)



第 11 図・図版 5 沖縄産無釉陶器 3 (S=2/5)

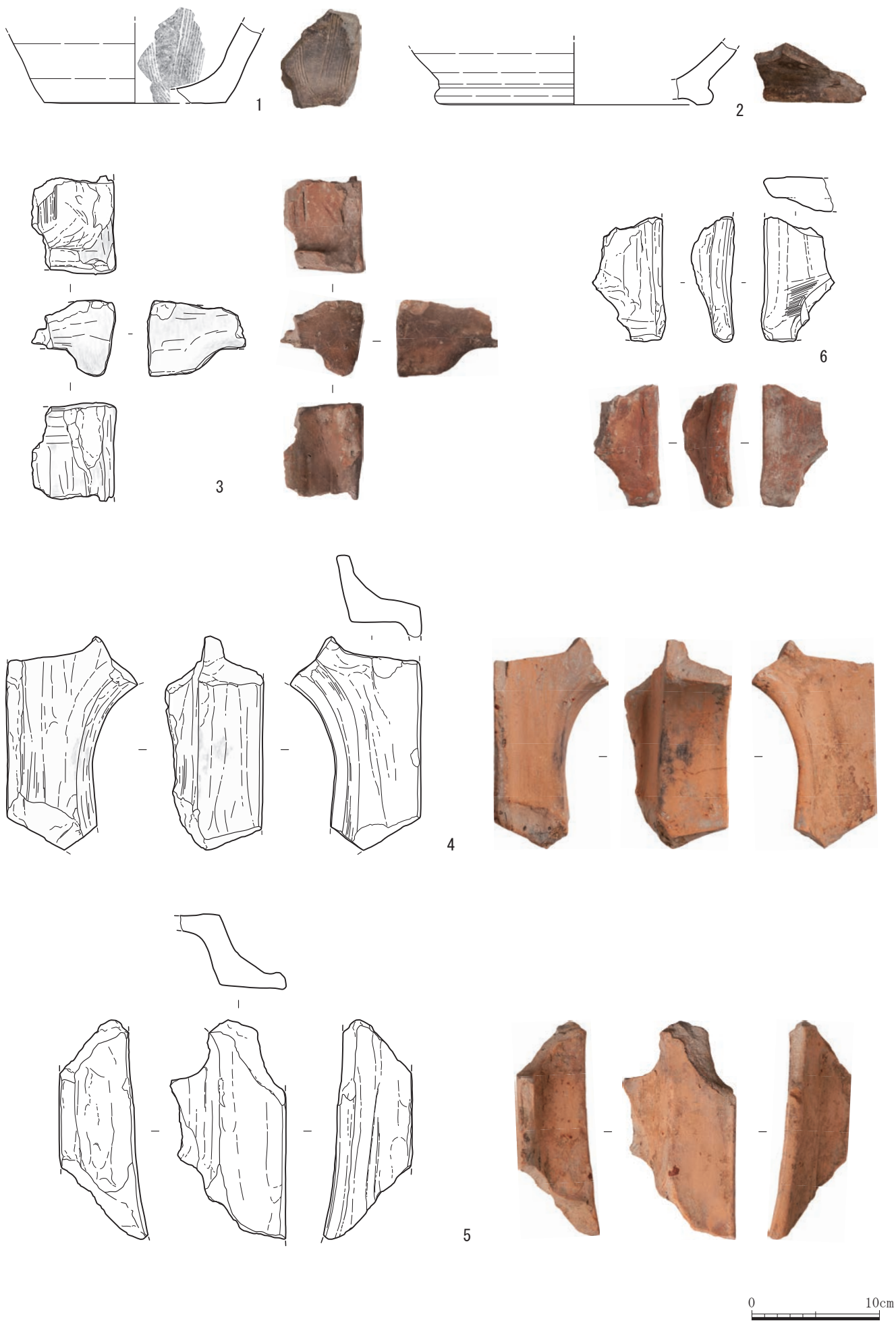
(3) 瓦質土器

総数 21 点の資料が得られ、うち 6 点を図示・掲載した。

図 1 は播鉢である。比較的急角度で立ち上がる器形で、櫛目はかなり疎である。内外面に煤状炭化物が付着しており、調理具以外の用途があった可能性を窺わせる。図 2 の内面は被熱・燃焼による黒化が認められたため、火鉢とした。外面にも煤状炭化物が付着する。図 3～6 は焜炉である。図 3 は方形焜炉の底部の一隅として捉えた。辺の内側が丸くなる足が付くが、この足の上面側も生きた面が残っているため、方形の浅箱と言って良い器形なのかもしれない。被熱痕や炭化物の付着は認められなかった。図 4・5 は、胎土の色調・質感・混入物から同一産地・同一器種と考えられる。金雲母が混入していることからすると、本土産か。図 4 は馬蹄形焜炉の鍋台側縁部、図 5・6 は方形前庭部の側縁部と思われる。

第 6 表 瓦質土器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	素地	実測 番号
第 12 図・ 図版 6	1	播鉢	底	- 14.2	内外面轆轤ナデ。外底面ナデ。櫛目は 10 本 2.1cm 幅が 1 単位。内外面に煤状炭化物付着。	青灰色	実 128
	2	火鉢	底	- 21.8	内外面横ナデ。付高台周辺轆轤ナデ。内面被熱により黒化。外面煤状炭化物付着。	にぶい黄褐色	実 89
	3	焜炉	底	6.0 -	方形焜炉の隅底部。高さ 2cm の足あり。内底にヘラ傷。	にぶい黄橙色	実 136
	4	焜炉	-	- -	ナデ。内面僅かに煤状炭化物付着。	橙色 赤色粒・金雲母	実 139
	5	焜炉	-	5.9 -	ナデ。ヘラ状工具痕。	橙色 赤色粒・金雲母	実 138
	6	焜炉	-	- -	ナデ。	橙色 茶色粒	実 137



第12图·图版6 瓦質土器 (S=1/4)

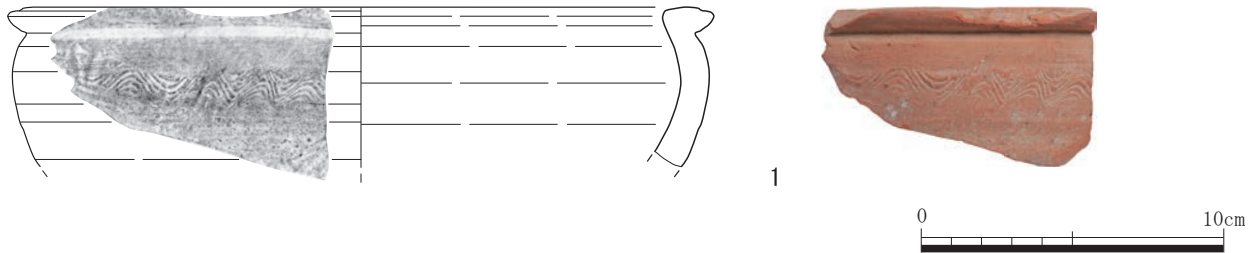
(4) 陶質土器

総数 364 点の資料が得られた。部位別には、口縁部片が 63 点、胴部片が 268 点、底部片が 33 点となる。図示・掲載したのは 1 点のみである。

図 1 は、方言で「ミジクブサー」と呼ばれる水鉢である。口縁部は外側に折り曲げられ、体部外面に楕円波状文が描かれる。

第 7 表 陶質土器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	素地	実測 番号
第 13 図 図版 7	1	水鉢	口	23.3 - -	口縁は外側に折り曲げる。内外面轆轤ナデ。体部外面に楕円波状文。楕目は 4 本 1 単位か。	橙色	実 188



第 13 図・図版 7 陶質土器 (S=2/5)

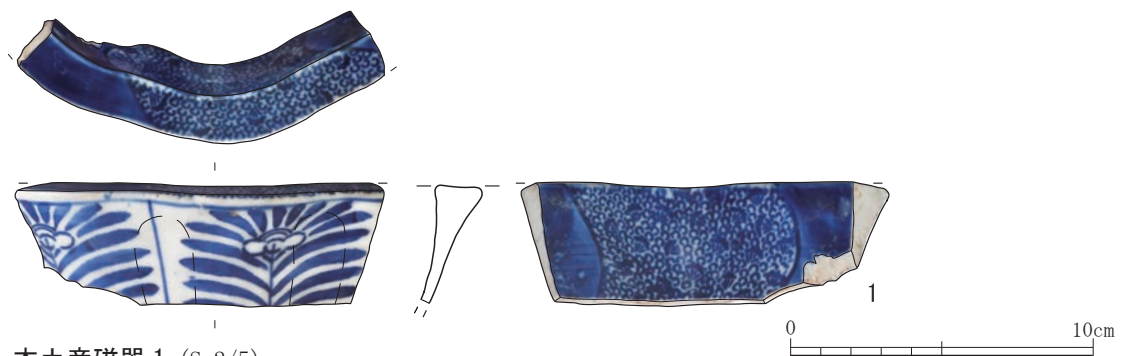
(5) 本土産磁器

総数 1,915 点の資料が得られた。部位別には、口縁部～底部が 153 点、口縁部片が 723 点、胴部片が 604 点、底部片が 435 点となる。これらのうち 5 点を図示・掲載した。

図 1 は上面観が緩やかな多角形となる。鉢であろうか。口唇面及び内面の白地には鹿子が充填され、外面には縦の区画の中に草花文が描かれる。図 2・3 は砥部焼の碗、いわゆる「スンカンマカイ」と呼ばれるものである。外反口縁で、型紙摺りを特徴とする。図 2 の見込みの文様は判然としないが、他の破片との照合から梅花かとも思われた。いずれにせよ、割合としてはかなり少ない文様のようなのである。図 4・5 はいずれも瀬戸・美濃系と考えられる。図 4 は小型の碗で、外底面に「沢田精製」の銘がある。外面は桜花文と思われるが、枝の部分（茶色）のみが残る。図 5 は外面飛鶴文の小杯である。

第 8 表 本土産磁器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	文様	特徴	産地	実測 番号
第 14 図 図版 8	1	鉢?	口	- - -	外面：区画の中に草花、口唇面・内面：白地に鹿子充填。	口縁肥厚。上面観は多角形。		実 87
第 15 図 ・ 図版 9	2	碗	口～底	14.4 6.6 4.5	外面：青海波・窓絵、腰：ラマ蓮弁、内唇：輪宝文帯、見込：梅花?	口縁外反。轆轤成形。型紙刷り。	砥部	実 180
	3	碗	口～底	13.2 6.0 3.9	外面：点描地・菱形窓に菊花、腰：三角文、見込：五弁花、内唇：点描三角と梅花帯。	口縁外反。轆轤成形。型紙刷り。五足のハマ痕。	砥部	実 181
	4	碗	底	- - 3.2	外面：桜花か、高台：鋸歯状の圏線、銘：沢田精製。	轆轤成形。外面は茶色のみ残存。	瀬戸 美濃	実 75
	5	杯	口～底	5.0 2.9 1.8	外面：飛鶴に松。	口縁僅かに外反。ゴム判。	瀬戸 美濃	実 76 実 77



第 14 図・図版 8 本土産磁器 1 (S=2/5)



第 15 図・図版 9 本土産磁器 2 (S=2/5)

(6) 本土産陶器

総数 87 点の資料が得られた。部位別には、口縁部片が 21 点、胴部片が 53 点、底部片が 13 点となる。これらのうち 18 点を図示・掲載した。

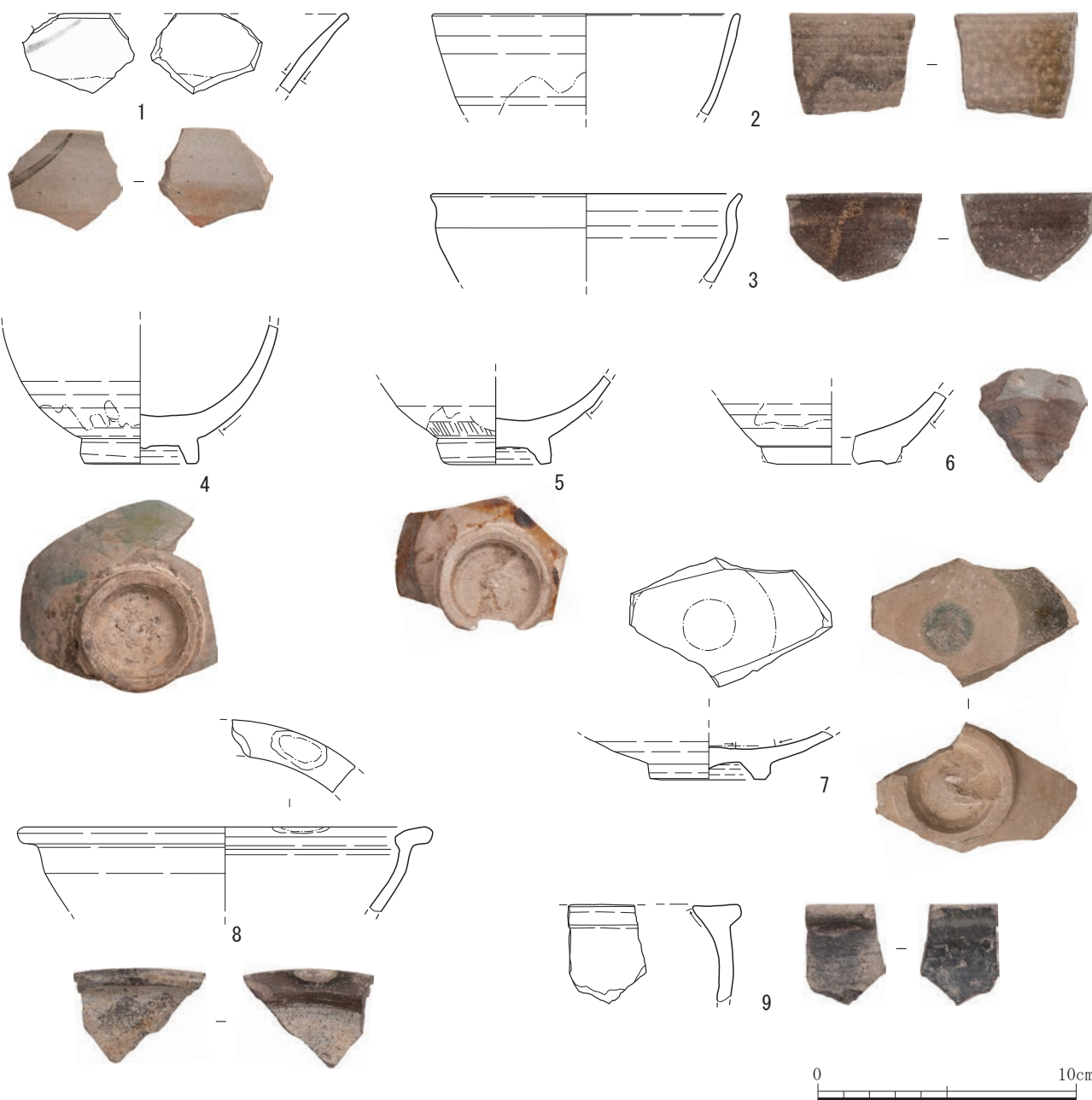
図 1～6 は碗である。図 1 は鉄絵が描かれた碗である。口縁部はかなり外側に広がるようである。図 2 は口縁が直口、図 3 は口縁が僅かに括れるものである。図 4・5 は肥前産と思われる、高台付近の削り痕が顕著である。図 4 は外面に青緑釉が施される。図 6 は底が厚く、高台は低い。図 7 は肥前産の皿で、内面に青緑釉を施し、内底を蛇の目に釉剥ぎする。図 8～10 は、薩摩産の鉢とした。口唇部の形状、自然釉の掛かり方、胎土等に共通の特徴が認められる。図 11・12 は備前産の播鉢である。どちらも内面にピンクがかかった色合いが感じられ、播目が疎となっている。図 13・14 は花鉢とした。どちらも胎土の色調が暗い。図 13 には花文の陽刻がなされ、図 14 には波状に摘み出された突帯が貼られている。図 15 は甕か壺の胴部片で、自然釉の特徴が薩摩産の鉢としてものに酷似する。図 16 は信楽焼土瓶の蓋である。緑色釉の上にイチチンで若竹文が描かれ、内面には白化粧がなされる。図 17 は紫泥で、外面の陰刻は「…局」と読める。図 18 は信楽焼の大便器片である。施釉面が内側になり、後辺の左隅部分と考えられる。

第 9 表 -1 本土産陶器観察一覧

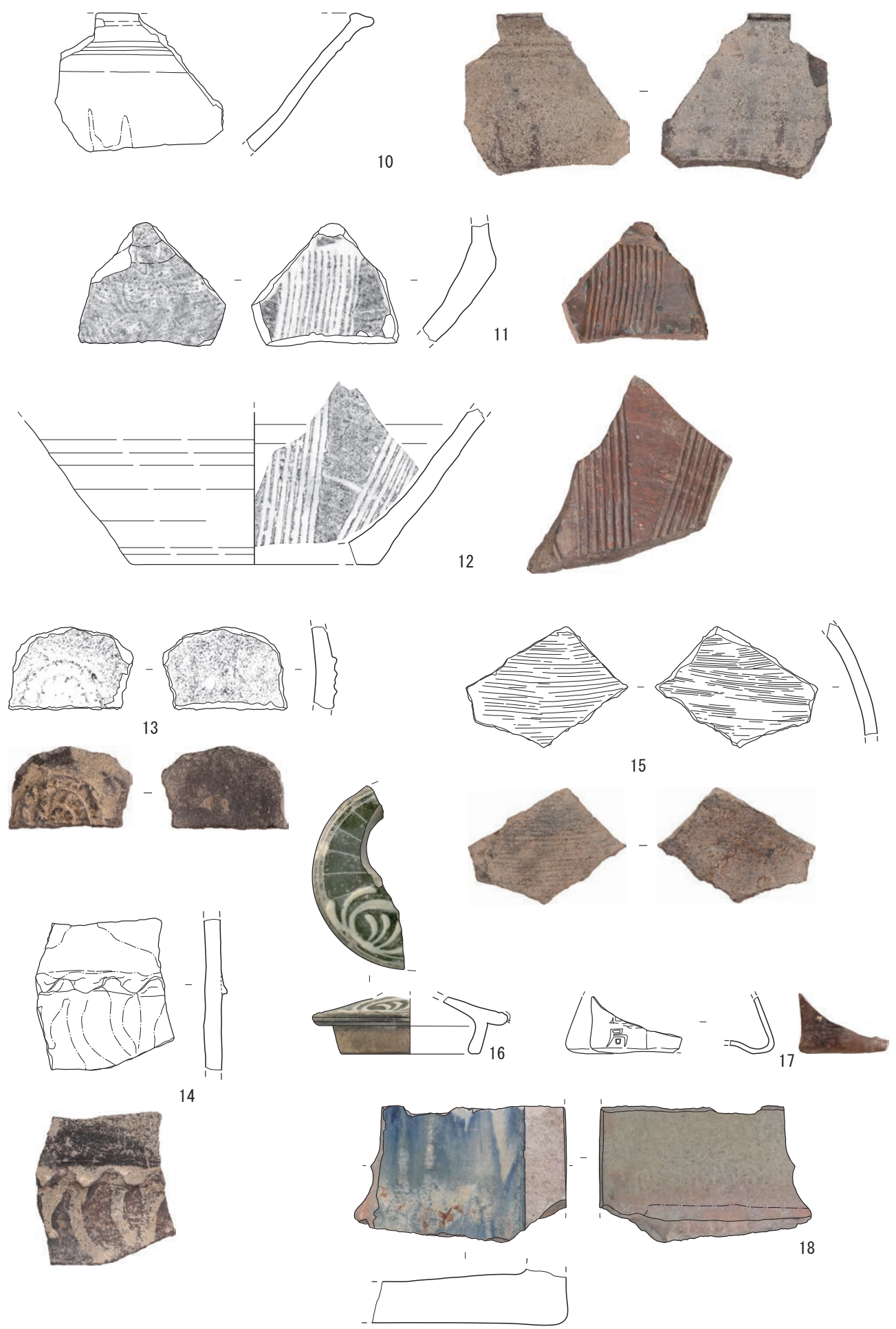
第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	素地	生産地	実測 番号
第 16 図 ・ 図版 10	1	碗	口	- - -	口縁は外側に開く。鉄釉で草文を描く。内外面に透明釉（ともに体部下半は露胎か）。	灰白色	肥前	実 93
	2	碗	口	11.9 - -	内外面に灰釉。	灰白色		実 111
	3	碗	口	12.0 - -	天目碗。内外面に自然釉。	黄灰色	瀬戸？	実 118
	4	碗	底	- - 4.6	外面に青緑釉（腰以下が露胎）。内面に透明釉。高台上端部の削りが顕著。	淡黄色	肥前	実 82 実 84
	5	碗	底	- - 4.1	腰に放射状の削り痕。内外面に胎釉（外面下半は露胎）。	灰白色	肥前	実 80
	6	碗	底	- - 5.0	内外面に灰釉（外面下半は露胎）。削り出し高台（底は厚く高台は低い）。	灰色	肥前系	実 126
	7	皿	底	- - 4.4	内面に青緑釉。内底を蛇の目釉剥ぎ。	にぶい黄橙色	肥前系	実 83
	8	鉢	口	16.1 - -	内外面轆轤ナデ。内外面自然釉。鏝状となった口唇面に目跡。	赤灰色	薩摩？	実 119
	9	鉢	口	- - -	内外面轆轤ナデ。口縁部内側は内湾し、口唇部が鏝状となる。外面に自然釉、内面に黒色釉。	褐灰色	薩摩？	実 109
	第 17 図 図版 11	10	鉢	口	- - -	内外面轆轤ナデ。口唇部は鏝状となり、内側には明瞭な段を有する。内外面に自然釉。	暗灰色	薩摩？

第9表-2 本土産陶器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	素地	生産地	実測 番号
第17 図・ 図版 11	11	播鉢	胴	— — —	口縁部に段あり。外面は粗いナデ。楯目は12本幅3.6cmが1単位。	赤灰色	備前	実131
	12	播鉢	底	— — 12.0	底部から開きながら立ち上がる。内外面轆轤ナデ。楯目は7本2.6cmが1単位。	灰赤色	備前	実129
	13	花鉢	胴	— — —	外面に自然釉。花文の陽刻。	暗灰色	薩摩?	実94
	14	花鉢	胴	— — —	波状に摘み出された突帯。外面に自然釉。	暗灰色 白色粒	薩摩?	実127
	15	甕か壺	胴	— — —	内外面轆轤ナデ。外面に自然釉。	にぶい黄橙色赤褐色	薩摩?	実121
	16	土瓶	蓋	9.4 2.7 6.6	外面(上面)に緑釉を施釉後、白土でイッチン(若竹文)。内面(下面)は内底以外に白化粧。	灰白色	信楽系	実157
	17	瓶?	底	— — 10.0	紫泥。外面に「…局」の印刻。上面観は多弁花形か。上げ底。	赤灰色		実74
	18	大便器	後方隅?	— — —	外面に透明釉、内面に青緑色釉で文様。下方は赤化。後辺の左隅か。	灰白色 白色粒	信楽系	実85



第16図・図版10 本土産陶器1 (S=2/5)



第17図・図版11 本土産陶器 2 (S=2/5)

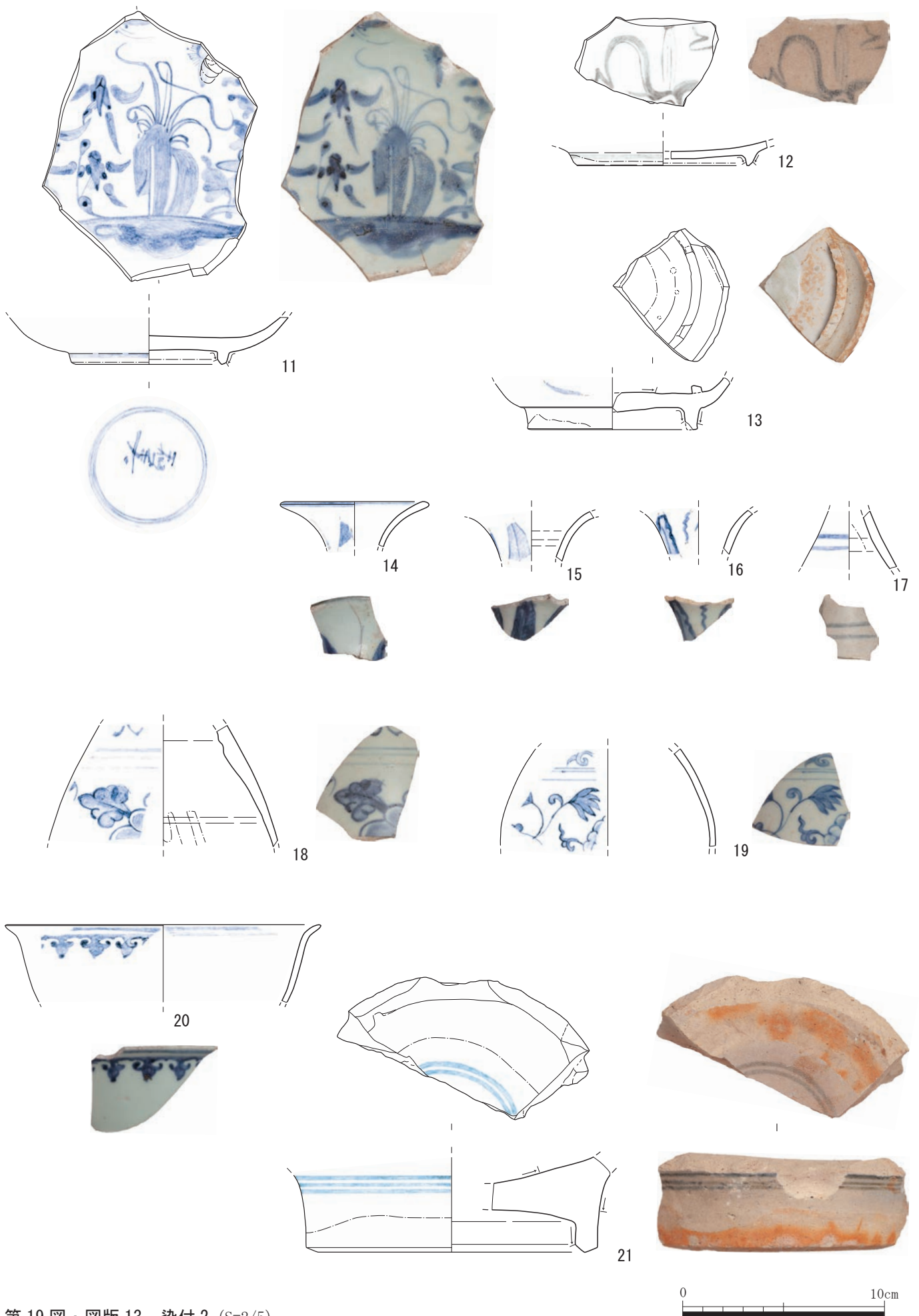
(7) 染付

総数 554 点の資料が得られた。部位別には、口縁部～底部が 1 点、口縁部片が 162 点、胴部片が 231 点、底部片が 160 点となる。これらのうち 21 点を図示・掲載した。

図 1～9 は碗である。図 1～6 は腰が張り、真っ直ぐに立ち上がるもので、15～16 世紀のものか。図 1 の口縁外面には波濤文が描かれ、体部は殆ど残っていないがアラベスク文が展開するものと思われる。図 3 の腰には芭蕉文、見込みには法螺貝文が描かれる。見込み「福」の図 5 は、底部の形状が図 3・4 に似ているため、ここにまとめた。図 7・8 は口縁部が外反する。図 7 は寿文のみが残るが、花文と寿文が交互に配されるものと思われる。18～19 世紀。図 9 は底部資料で、見込みに「寿」、高台内に「和美」とある。図 10～13 は皿である。図 10 は碁笥底で、見込みに野菜文が描かれる。図 11 は見込みに草花文、高台内に「和美」。図 12 は玉取獅子文か。呉須の発色が悪い。図 13 は、焼成時に上に乗っていたもの高台が貼り付いたままの資料である。図 14～19 は瓶である。図 14～16 は、いずれも口縁がラッパ状に開く。図 18 には野菜文 or 菊花唐草文、図 19 には牡丹唐草文が描かれる。図 20 は鉢とした。口縁部は外反し、外面に輪宝文が描かれる。図 21 は大鉢である。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。

第 10 表 染付観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	実測 番号
第 18 図 ・ 図 版 12	1	碗	口	14.4 - -	口縁外面：波濤文。体部：アラベスク文？ 口縁内面：1 条圏線。	実 44
	2	碗	口	11.4 - -	口縁外面：斜格子文と花草文を交互に配した襷文。口縁内面：2 条圏線。	実 42
	3	碗	底	- - 5.4	腰：芭蕉文。高台：圏線。内底：法螺貝文。15C 末～16C 中。	実 31
	4	碗	底	- - 6.0	体部：唐草文。腰：ラマ式蓮弁文。高台：圏線。内底：2 条圏線。	実 25
	5	碗	底	- - 6.2	腰：圏線。内底：「福」・2 条圏線。	実 40
	6	碗	口	12.4 - -	口縁外面：2 条圏線。体部：唐草文。腰：圏線。口縁内面：1 条圏線。内底：圏線。	実 34
	7	碗	口	- - -	口縁外面：2 条圏線。体部：唐草文。口縁内面：文字文。貫入。	実 39
	8	碗	口	11.2 - -	口縁外面：2 条圏線。体部：寿文。口縁内面：1 条圏線。内底：圏線。	実 43
	9	碗	底	- - 7.8	腰：くずれた蓮弁文。高台：圏線。高台内：「和美」・2 条圏線。内底：「寿」。	実 27
	10	皿	底	- - 4.4	碁笥底。腰以下露胎（外底には釉が流れ込んでいる）。体部：草文？ 腰：2 条圏線。内底：野菜文・2 条圏線。	実 178
第 19 図 ・ 図 版 13	11	皿	底	- - 7.6	高台：圏線。高台内：「和美」・2 条圏線。内底：草花文（菖蒲？蘭？）。	実 26
	12	皿	底	- - 8.6	高台：圏線。内底：玉取獅子文？ 呉須の発色はにぶい。	実 28
	13	皿	底	- - 8.4	体部：不明。内底：蛇の目釉剥ぎ、重ね焼きの高台が残存。	実 32
	14	瓶	口	7.4 - -	口唇：圏線状。頸部：不明。口縁内面：1 条圏線。	実 37
	15	瓶	頸	- - -	頸部：芭蕉文？	実 45
	16	瓶	頸	- - -	頸部：芭蕉文？	実 41
	17	瓶	頸～体	- - -	外面：2 条圏線。内面露胎（一部に釉が垂れている）。	実 36
	18	瓶	頸～体	- - -	外面：野菜文 or 菊花唐草文・3 条圏線。内面一部露胎。	実 29
	19	瓶	頸～体	- - -	外面：牡丹唐草文・3 条圏線。	実 38
	20	鉢	口	15.6 - -	口縁外面：輪宝文。口縁内面：2 条圏線。	実 35
	21	大鉢	底	- - 14.4	高台：圏線。内底：蛇の目釉剥ぎ内に圏線 2 条。量付けは内外から斜めに削る。	実 33



第19图·图版13 染付2 (S=2/5)

(8) 青磁

総数 664 点の資料が得られ、部位別には、口縁部～底部が 2 点、口縁部片が 249 点、胴部片が 310 点、底部片が 103 点となる。ほぼ 14～16 世紀に収まるものであるが、1 点だけ 13 世紀後半と考えられる口縁部片が確認できた。これらのうち 19 点を図示・掲載した

図 1～8 は碗である。図 1 は外面に鎬蓮弁文をもつもので、13 世紀後半に位置付けられる。今回得られた青磁の中では最も古相となる。図 2 は口縁が外反するもので、内面に雷文帯をもつ。図 3 は外面に、図 4 は内外面に雷文帯をもつ。図 5～7 は外面に蓮弁文をもち、うち図 7 は小型のものである。図 8 は底部資料で、内底に印花文を施す。

図 9～12 は皿である。図 9 は腰折の稜花皿で、貫入が著しい。文様はもたない。図 10 は上面観が八角形となり、内面に雷文帯と唐草文がみられる。図 13・14 は瓶である。図 14 は内外面ともに施釉され、外面に唐草文が施される。

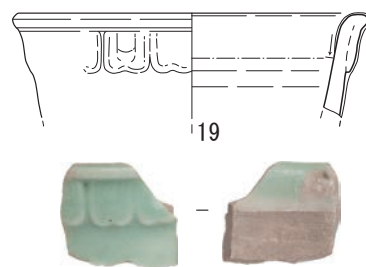
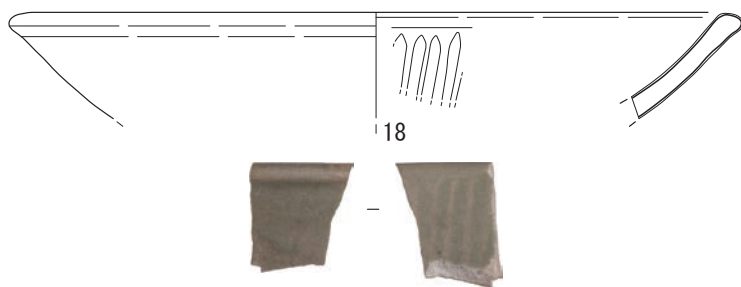
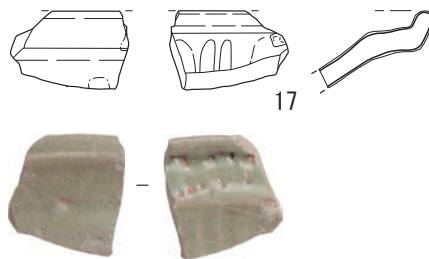
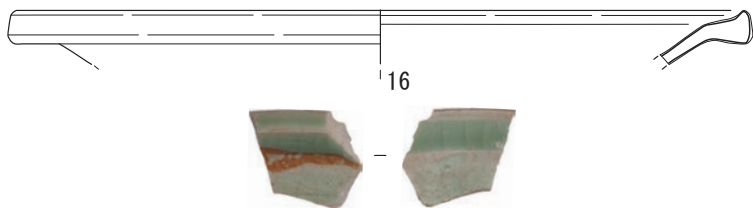
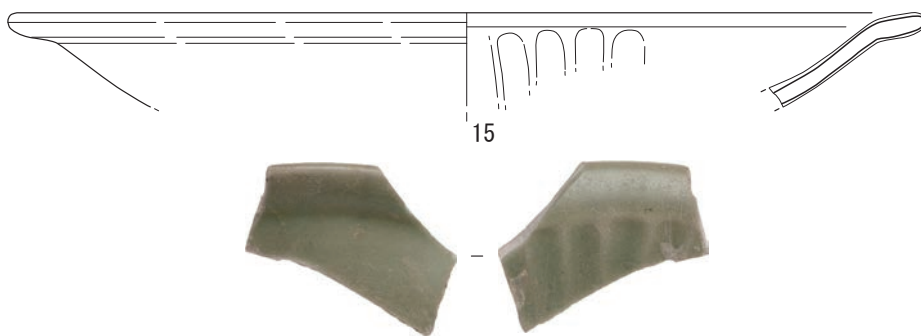
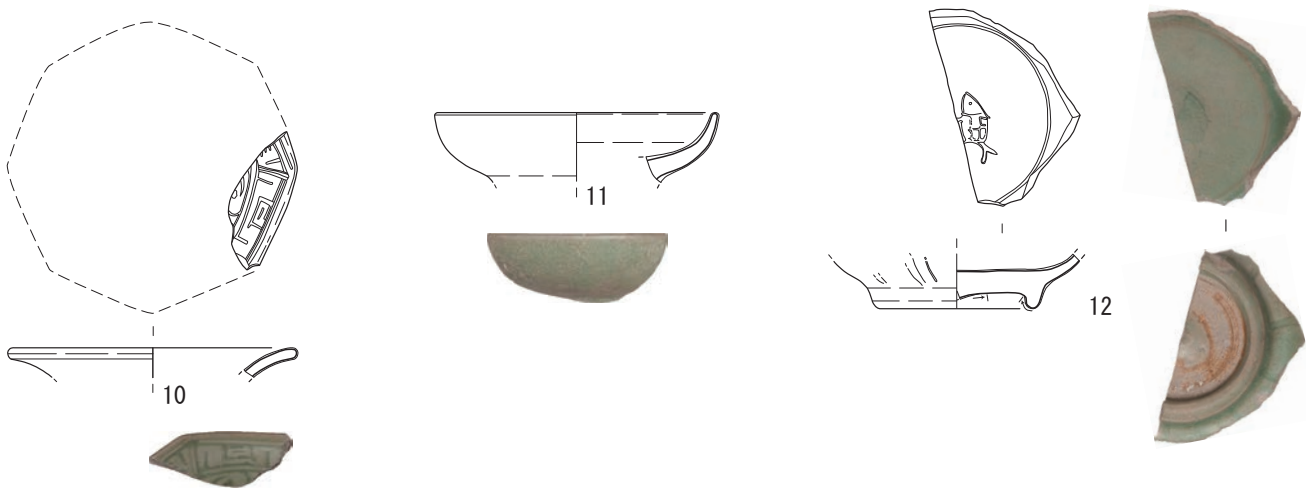
図 15～18 は盤の口縁部片で、全ての内面に蓮弁文が施される。図 16・17 は鏝縁となる。図 19 は香炉で、内面は口縁より下方が露胎する。外面の口縁直下には貼花が施される。

第 11 表 青磁観察一覧

第 20 図・図版 14	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	器形・文様構成	釉色・範囲	素地・質	生産年代 生産地	実測 番号
第 20 図・ 図版 14	1	碗	口	15.5 - -	口縁部端わずかに外反、外面鎬蓮弁文。	暗オリーブ色	灰白色 緻密	13C 後半 龍泉窯	実 191
	2	碗	口	16.6 - -	口縁外反、内面雷文帯+唐草文。	明オリーブ灰色	灰白色 緻密	14C 後半～15C 後半 龍泉窯	実 55
	3	碗	口	14.8 - -	口縁直口、外面雷文帯+蓮弁文。	灰白色	灰白色 緻密	14C 後半～15C 後半 龍泉窯	実 56
	4	碗	口	17.0 - -	口縁直口、口縁部内外面にスタンプによる雷文帯。	灰オリーブ色	灰白色 緻密	15C 後半～16C 前半 龍泉窯	実 53
	5	碗	口	13.2 - -	口縁直口、外面線刻蓮弁文。	明緑灰色	灰白色 緻密	15C～16C 龍泉窯	実 50
	6	碗	口	14.5 - -	口縁直口、外面雑な剣先蓮弁文。	灰オリーブ色	灰白色 緻密	15C 後半～16C 龍泉窯	実 62
	7	碗	口～胴	7.9 - -	直口、外面細蓮弁文。	明オリーブ灰色	灰白色 緻密	15C 後半～16C 龍泉窯	実 60
	8	碗	底	- 5.8	内底部印花文（圏線+草文）、高台内環状釉剥ぎ。	緑色 高台内露胎	灰白色 緻密	14C～16C 龍泉窯	実 46
	9	皿	口～底	10.9 3.05 5.2	腰折稜花、貫入、被熱？、外底無釉。	灰白色	灰白色 緻密	15C 龍泉窯	実 47
第 21 図・ 図版 15	10	皿	口	9.6 - -	外反、八角形、内面雷文帯+唐草文。	灰オリーブ色	灰白色 緻密	14C 後半～15C 後半 龍泉窯	実 61
	11	皿	口	9.4 - -	無文、直口。	外：明オリーブ灰色 内：明緑灰色	灰白色 緻密	14C～15C 龍泉窯	実 52
	12	皿	底	- 5.6	内底部印花魚文、外面線描き蓮弁文、高台内環状釉剥ぎ。	外：明緑灰色 内：明緑灰色・明オリーブ灰色 高台内一部露胎	灰白色 緻密	14C～15C 龍泉窯	実 49
	13	瓶	口	6.8 - -	口縁外反。	灰オリーブ色	灰白色 緻密	15C～16C 龍泉窯	実 58
	14	瓶	胴	- -	外面刻花唐草文。	外：灰オリーブ色 内：明オリーブ灰色・オリーブ灰色	灰白色 緻密	15C～16C 龍泉窯	実 59
	15	盤	口	30.4 - -	内面陰刻蓮弁文、平縁。	オリーブ灰色	灰白色 緻密	14C 龍泉窯	実 48
	16	盤	口	24.4 - -	鏝縁、内面陰刻蓮弁文。	明緑灰色	灰白色 緻密	14C～15C 龍泉窯	実 57
	17	盤	口	- -	鏝縁、内面陰刻蓮弁文。	外：灰オリーブ色 内：オリーブ灰色	灰白色 緻密	14C～15C 龍泉窯	実 63
	18	盤	口	24.2 - -	内面陰刻蓮弁文、直口、玉縁状に肥厚。	外：オリーブ灰色 内：オリーブ灰色・明オリーブ灰色	灰白色 緻密	15C 龍泉窯	実 51
	19	香炉	口	11.8 - -	口縁外反、口縁外面直下に貼花、内面無釉。	明緑灰色 内面一部露胎	灰白色 緻密	龍泉窯？	実 54



第 20 图 · 图版 14 青磁 1 (S=2/5)



第 21 图 · 图版 15 青磁 2 (S=2/5)

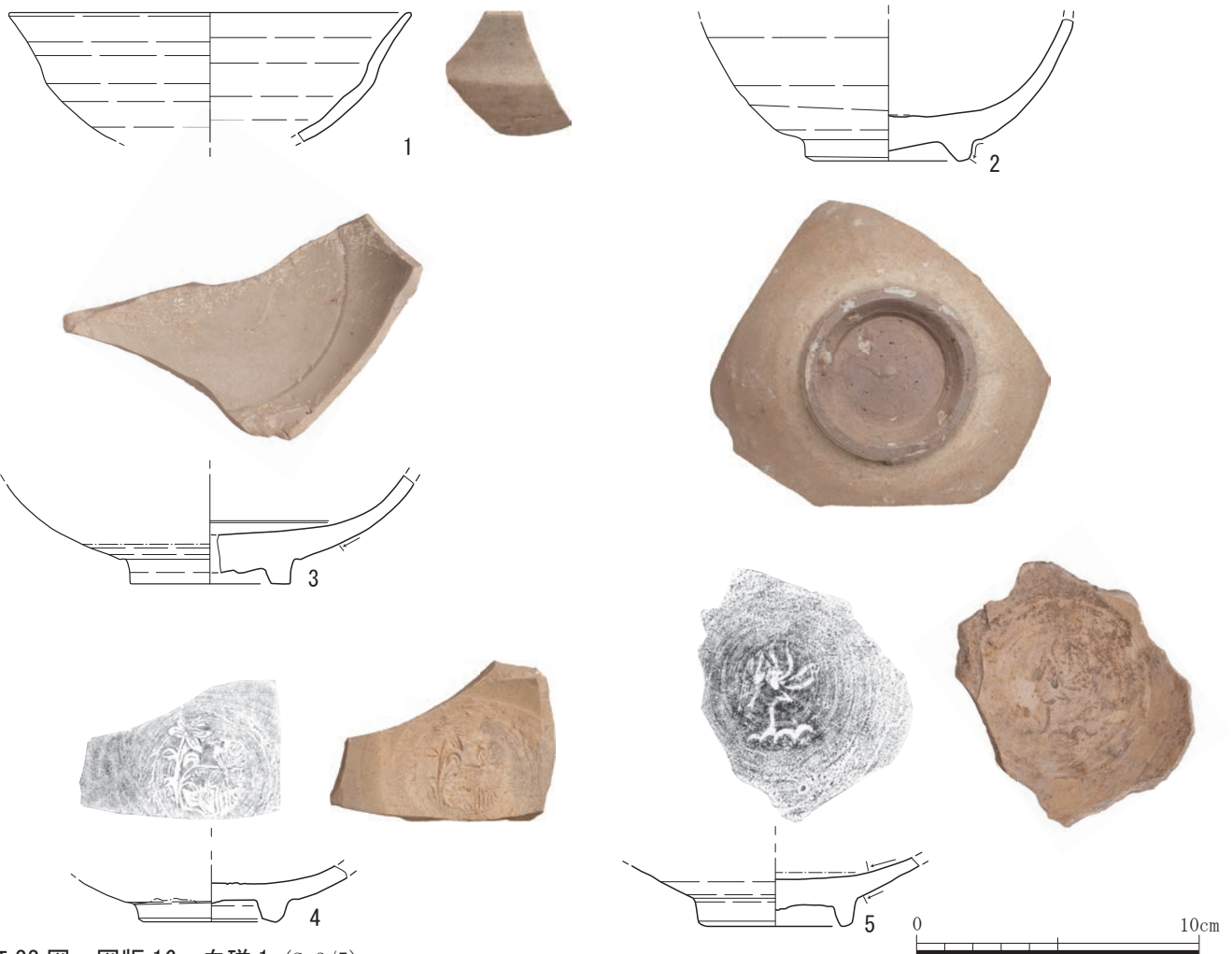
(9) 白磁

総数 167 点の資料が得られた。部位別には、口縁部～底部が 2 点、口縁部片が 53 点、胴部片が 74 点、底部片が 38 点となる。これらのうち 7 点を図示・掲載した。文中での分類は、森田 (1982) に準拠する。

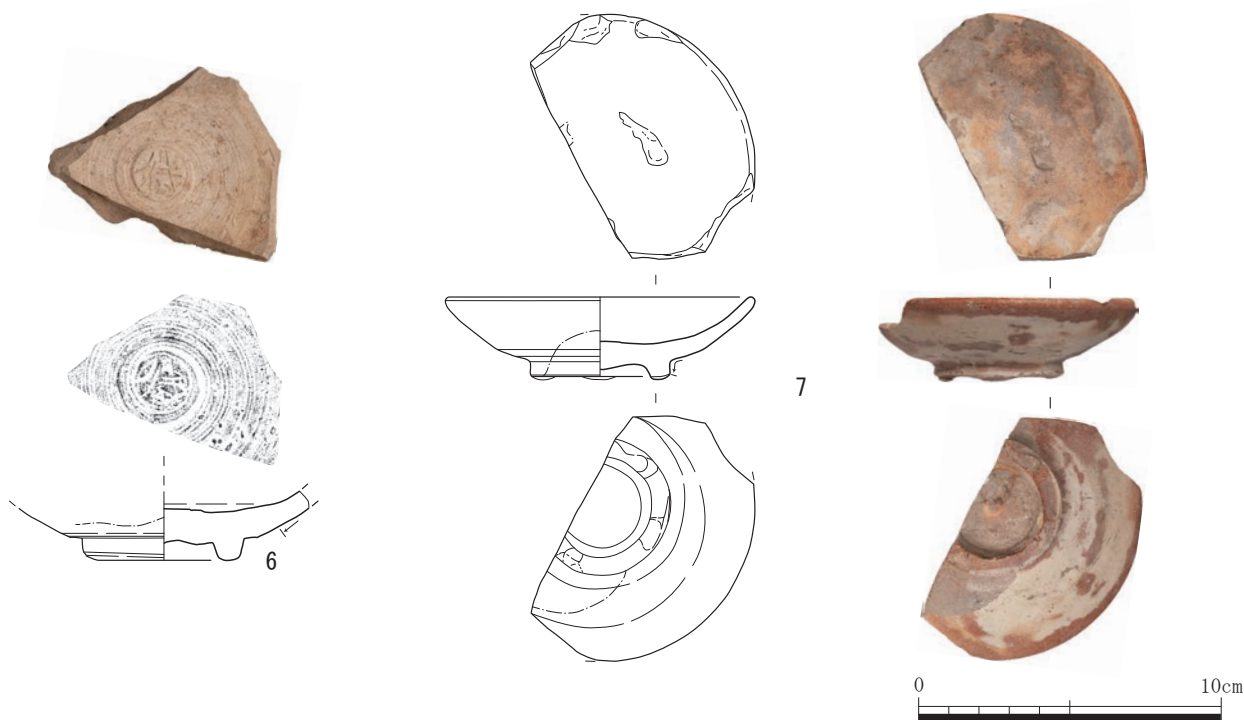
図 1～6 は碗である。図 1 は体部で屈曲し、口縁部は外反する。泉州窯系か。図 2・3 は森田 C 群に含まれるもので、閩清 (びんしん) 窯系と思われる。図 3 のみ内面に圈線をもつ。図 4～6 は森田 D 群に含まれるもので、劬武四都 (しょうぶしと) 窯系と思われる。いずれも内底の釉を掻き取った後に印花を施している。図 7 は小型の皿である。内底に目跡が残り、高台にも抉り入りが観察できる。激しく赤変しているが、原因は不明。森田 D 群に含まれる。

第 12 表 白磁観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	器形・文様構成	釉色・範囲	素地・質	生産年代 生産地	実測 番号
第 22 図・ 図版 16	1	碗	口	14.2 - -	体部で屈曲し、口縁は外反。	灰白色	灰白色 緻密	14C 後～15C 中 福建系	実 13
	2	碗	底	- - 5.8	丸みをもって立ち上がる。削り出し高台で、壘付を外から斜めに削り出す。	灰白色 高台内露胎	灰白色 緻密	14C 後～15C 初	実 67
	3	碗	底	- - 5.6	内面に一条圈線。削り出し高台で、壘付は平坦。	灰白色 外底露胎	灰白色 緻密	14C 後～15C 初	実 65
	4	碗	底	- - 5.1	内底の釉を掻き取りし、草花の印花文。削り出し高台で、壘付を内外から斜めに削り出す。	浅黄色 内外底露胎	淡黄色 緻密	15C 前～中 福建系	実 64
	5	碗	底	- - 5.4	内底の釉を掻き取りし、草花の印花文。削り出し高台で壘付はやや丸みを帯びる。	浅黄色 内外底露胎	灰白色 緻密	15C 前～中 福建系	実 66
第 23 図・ 図版 17	6	碗	底	- - 5.1	内底の釉を掻き取りし、「得」の印花文。削り出し高台で壘付はやや丸みを帯びる。	淡黄色 内外底露胎	淡黄色 緻密	15C 前～中 福建系	実 70
	7	皿	口～底	10.0 2.8 4.6	開きながら立ち上がる。口唇は丸い。腰部へラケズリ。高台に抉り入り 3ヶ所残存。内底に目跡 3ヶ所残存し、内底中心は盛り上がる。	淡黄白色 高台内と腰の一部が露胎	灰白色 緻密	15C 前～中 福建系	実 69



第 22 図・図版 16 白磁 1 (S=2/5)



第 23 図・図版 17 白磁 2 (S=2/5)

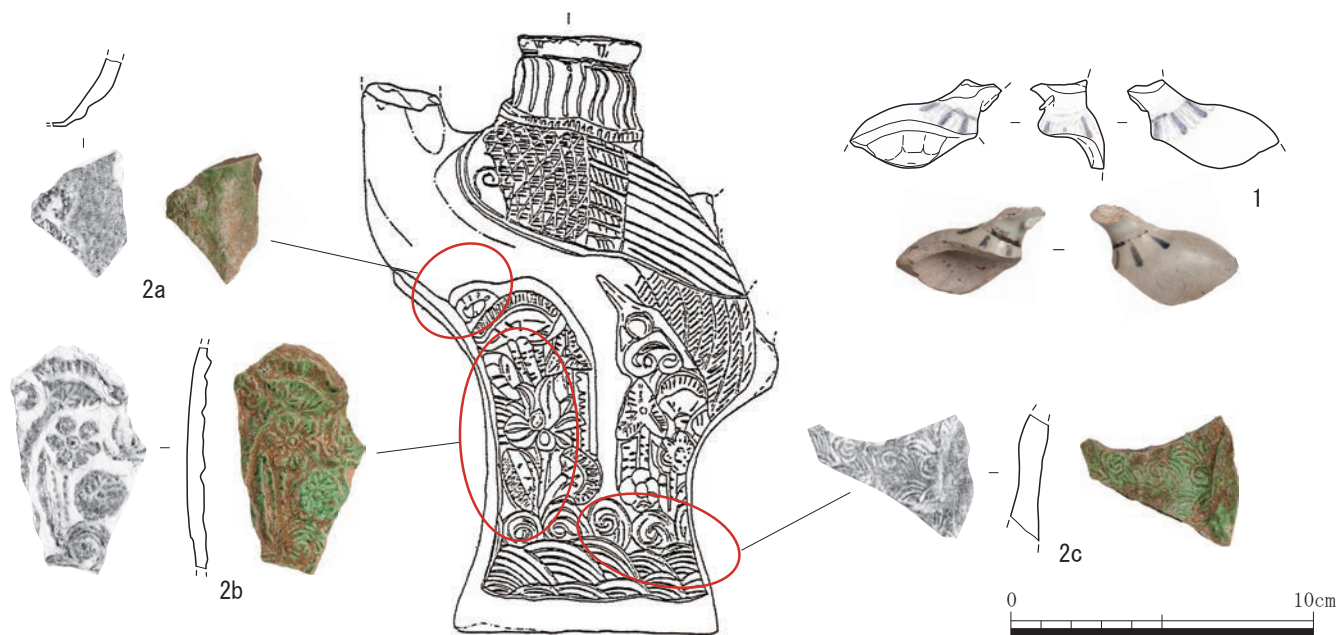
(10) その他の輸入陶磁器

4 点の資料を確認し、全て図示・掲載した。

図 1 は器種不明の破片で、動物の人形と仮定して実測した。括れた部分が首であるならば、耳のようなものも残存している。首の周りには呉須以外にも着色されていたようであるが、その痕跡を留めるのみであった。図 2a～2c は、緑釉陶器の鶴型水注で、同一個体と考えられる。部位の参考として、旧豊見城村で確認された明代三彩鶴型水注の実測図を転載した。

第 13 表 その他の輸入陶磁器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	観察事項	素地	実測 番号
第 24 図 図版 18	1	不明	型合わせ？ 首を一周する線は黒色。放射状の短線は発色の悪い呉須ともう一色あり。	灰白色	実 30
	2	鶴型水注	型による成形・陽刻。外面に緑釉。	にぶい黄橙色～灰色	実 152～154



第 24 図・図版 18 その他の輸入陶磁器 (S=2/5)

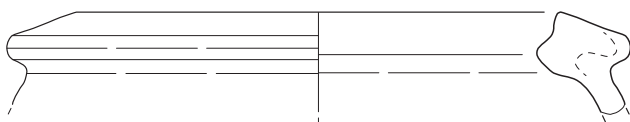
(11) 褐釉陶器

総数 354 点の資料が得られた。部位別には、口縁部片が 13 点、胴部片が 333 点、底部片が 8 点となる。これらのうち 12 点を図示・掲載した。

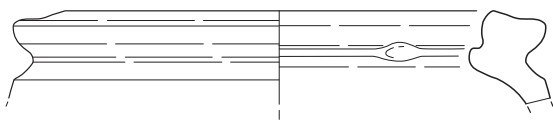
図 1～4 は大型壺で、灰色を基調とした胎土をもつ。15～16 世紀の中国産と考えられる。図 1～3 は口縁部片で、いずれも頸部が内傾し、口縁鑿は外側斜め下方に張り出す。破断面では粘土の継ぎ目がよく観察できる。図 4 は底部片で、上げ底となる。内面の釉色は明るい。図 5・6 は壺の底部で、いずれも明るい色調の胎土をもち、割れ口が鋭い。中国福建あるいは東南アジア産であろうか。図 7～12 は頸部が窄まる壺である。胎土には紫がかかったものや、破断面がサンドイッチ状になるものがみられる。図 10・11 は横耳を残す四耳壺の肩部片で、内面は施釉されない。図 10 の残存部内に圈線は認められず、器形の丸みあまり感じられない。一方の図 11 は、丸みを帯びており、内外面の刷毛目が明瞭に残る。

第 14 表 褐釉陶器観察一覧

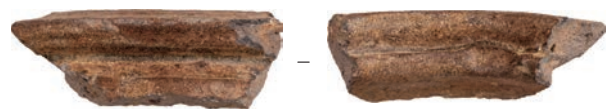
第図 図版	図 番号	器種	部位	口径 器厚 底径	器形・特徴	釉 色・範囲・掻き取り	素地 色・質・混和材	生産年代 生産地	実測 番号
第 25 図 ・ 図版 19	1	壺	口	20.6 0.8 -	頸部は内向。口縁は外に折り返し、斜め下に張り出す。	暗褐色 全面施釉	灰茶色 細かい 白色砂粒	15C～16C 中国	実 2
	2	壺	口	17.6 0.8 -	頸部は内向し、外面に稜をもつ。口縁は外に折り返し、鑿は「つ」字状。内面の口・頸部境部を隆起させ、一部潰れあり。	褐色 全面施釉	灰色 細かい 白色・黒色砂粒	15C～16C 中国	実 9
第 26 図 ・ 図版 20	3	壺	口	18.4 0.65 -	頸部は内向。口縁は外に折り返し、斜め下に張り出す。	暗褐色 全面施釉 (剥がれ著しい)	灰茶色 やや細かい 白色砂粒	15C～16C 中国	実 10
	4	壺	底	- 0.9～1.2 15.2	一旦くびれて逆「八」字状に開く。上げ底。轆轤痕。	褐色 外底面露胎	灰黄褐色 細かい 白色・黒色砂粒	15C～16C 中国	実 1
	5	壺	底	- 0.6 14.4	逆「八」字状に開く。轆轤痕。	無釉	灰白色、内面にぶい橙色 細かい 白色粗砂粒	16C～17C 中国南部・ 東南アジア	実 6
	6	壺	底	- 16.0	大きく開きながら立ち上がる。張り出し底。轆轤痕。	灰褐色 内面施釉	にぶい橙色 細かい 薄い層状	16C～17C 中国南部・ 東南アジア	実 5
	7	壺	口	18.0 - -	頸部最上部で更に外反。外面肥厚。口縁内端は窪む。	緑黒褐色 全面施釉	灰紫色 やや細かい 白色砂粒 孔隙目立つ	15C～16C タイ	実 3
	8	壺	口	11.0 - -	頸部は内向し口縁で大きく外反。肥厚部外面は窪む。口縁内縁に沈線。	緑黒褐色 外面と内面上方に施釉 内面に自然釉が垂れる	暗灰色 やや細かい 白色・赤色砂粒	15C～16C タイ	実 7
	9	壺	口	11.4 - -	丸みを帯びて外反。口縁先端は丸く肥厚。轆轤痕。	黄褐色 内面と口端部外面を掻き取り	灰色・浅赤色のサンド 細かい 黒色砂粒	15C～16C タイ	実 4
	10	壺	肩・耳	- 0.9 -	横耳の四耳壺。やや平たい紐をアーチ状に渡し、両端を外側に広げ貼り付け。内面に積痕。	緑黒褐色 外面施釉	灰色・赤褐色サンド やや細かい 白色砂粒		実 12
第 27 図 ・ 図版 21	11	壺	肩・耳	- 0.8 -	横耳の四耳壺。丸紐をアーチ状に渡し、両端を外側に広げ貼り付け。内外面刷毛目。	灰緑褐色 外面施釉	灰色・橙色サンド やや細かい 白色砂粒		実 11
	12	壺	底	- 0.7～0.9 8.2	僅かに丸みをもって立ち上がる。	黒褐色 内面底面附近のみ施釉	にぶい赤褐色～橙色 やや細かい 白色砂粒	15C～16C タイ	実 8



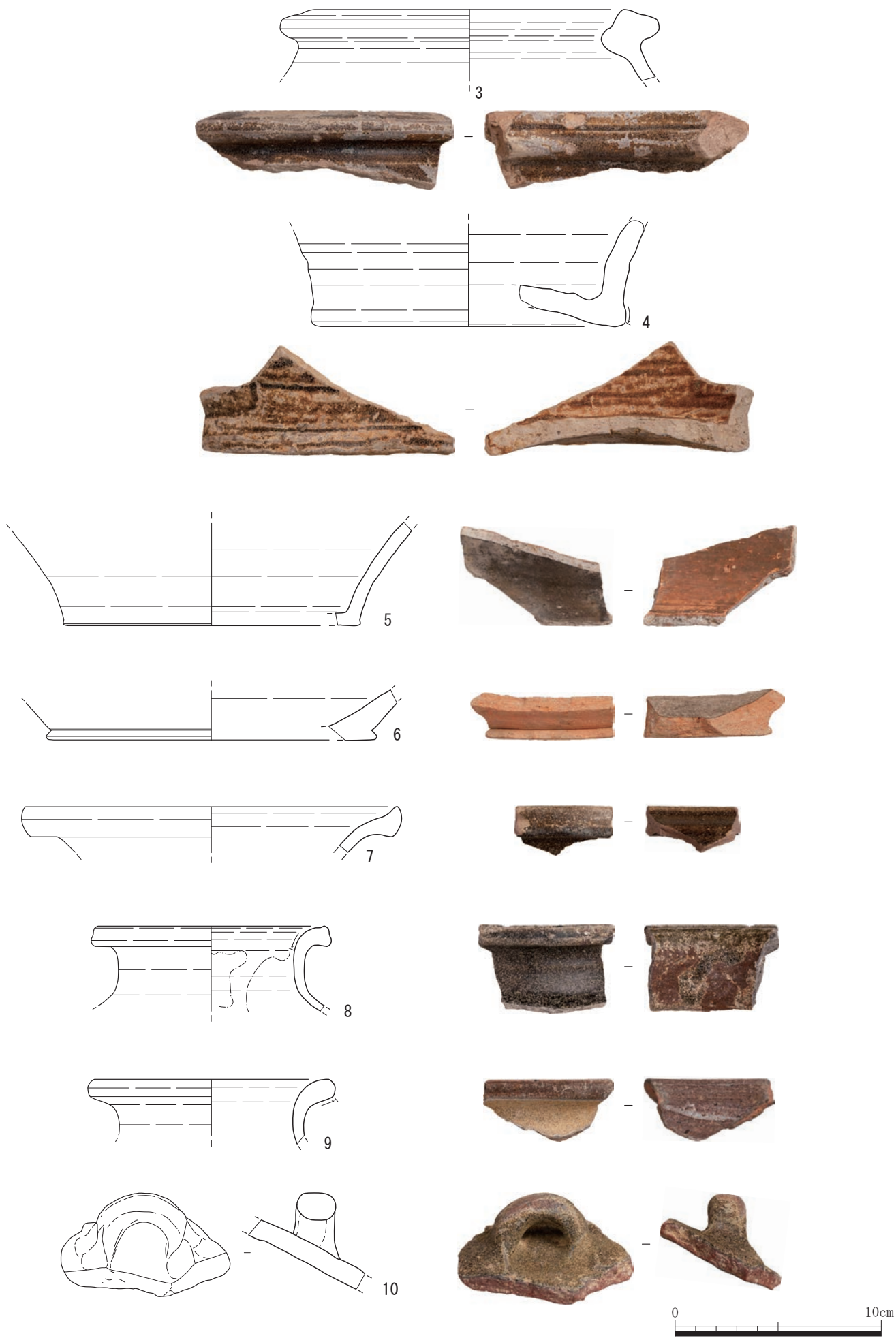
1



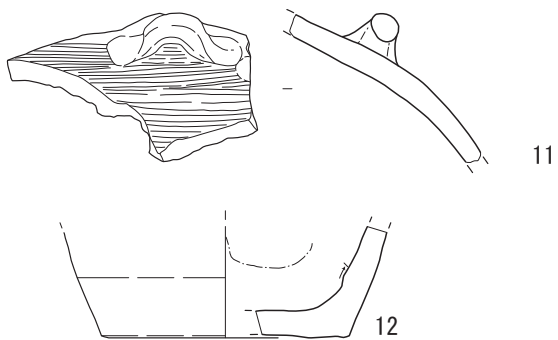
2



第 25 図・図版 19 褐釉陶器 1 (S=2/5)



第 26 图 · 图版 20 褐釉陶器 2 (S=2/5)



第 27 図・図版 21 褐釉陶器 3 (S=2/5)

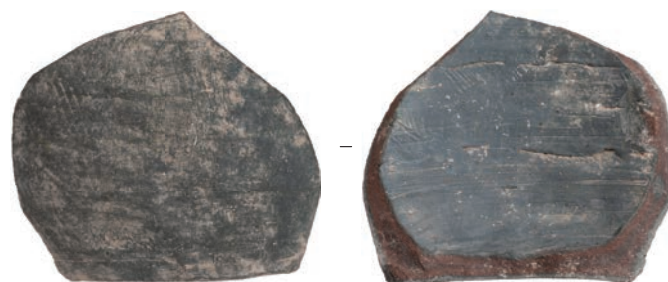
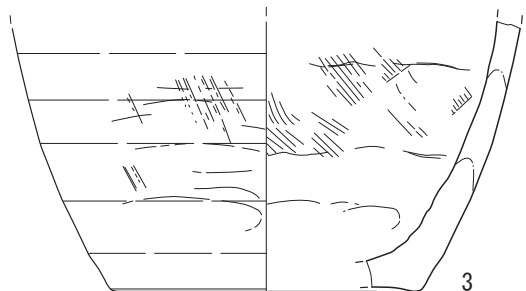
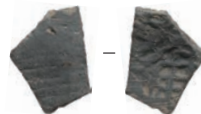
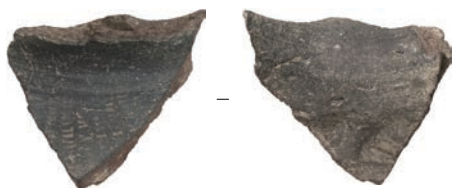
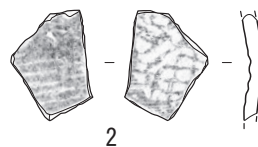
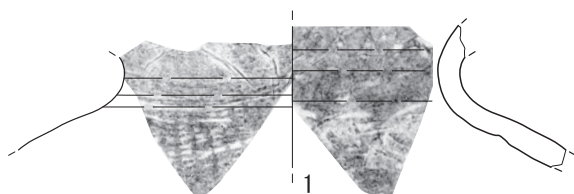
(12) 類須恵器

3 点の資料が得られ、全てを図示・掲載した。

図 1 は壺の頸部資料である。頸部は内外面とも丁寧に横ナデされ、肩部では外面に格子目タタキ、内面に当て具痕が残る。図 2 は胴部の小片である。外面に平行タタキ、内面に当て具痕が残る。内外面の色調は殆ど変わらない。図 3 は壺の底部である。胎土への白色粒の混入と内面の輪積み痕が目立つ。

第 15 表 類須恵器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	底径	観察事項	色調 (外面・素地・内面)	実測 番号
第 28 図 ・ 図 版 22	1	壺	頸	-	頸部内外面横ナデ。肩部外面格子目タタキ。肩部内面に円形当て具痕。	暗灰色・灰赤色・灰色	実 150
	2	壺	胴	-	外面平行タタキ→ナデ? 内面横ナデ→当て具痕。	暗青灰色・暗赤褐色・暗青灰色	実 149
	3	壺	底	10.2	外面平行タタキ→ナデ? 内面平行タタキ・横ナデ。内面の輪積み痕が顕著。	暗青灰色・暗赤褐色・暗青灰色	実 151



第 28 図・図版 22 類須恵器 (S=2/5)

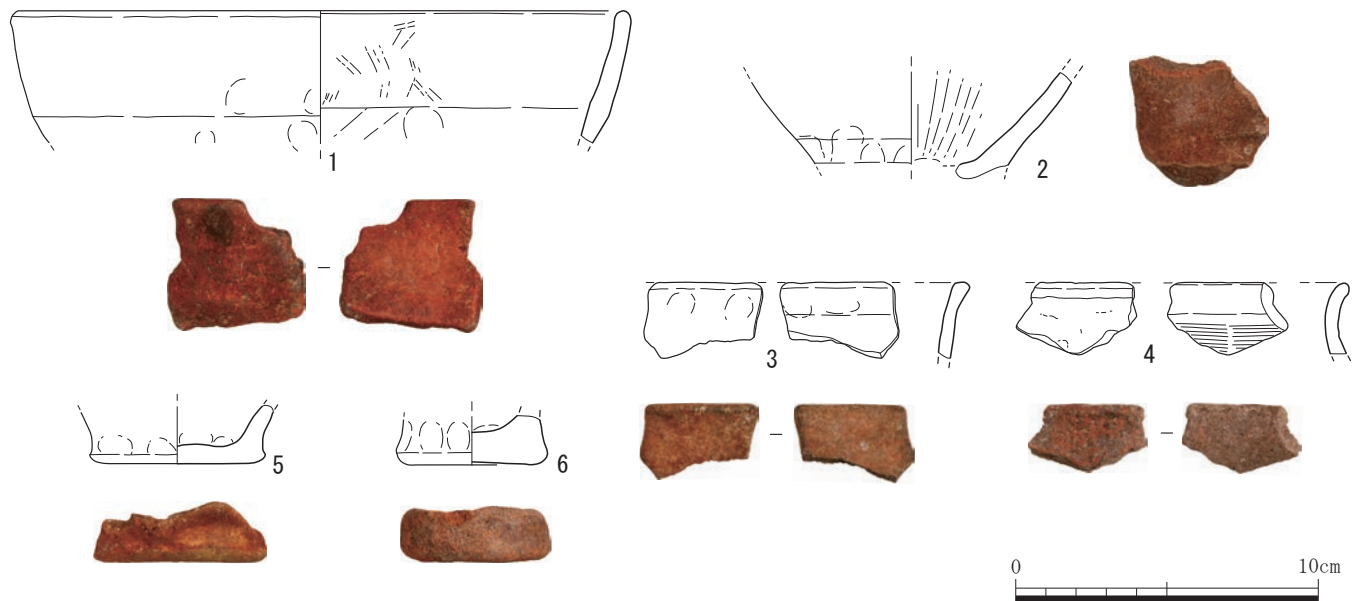
(13) 土器

今回調査区の殆どは、平安山原地域における「第2浜堤」に立地しており、この「第2浜堤」は貝塚時代後期の大当原式期以降に形成されたことが分かっている（『平安山原A遺跡』(2016) 参照）。したがってこれ以前の土器が出土しないことが予想され、まさにその通りの結果となった。総数 191 点の資料が得られ、部位別には、口縁部片が 7 点、胴部片が 174 点、底部片が 10 点となる。これらのうち 11 点を図示・掲載した。

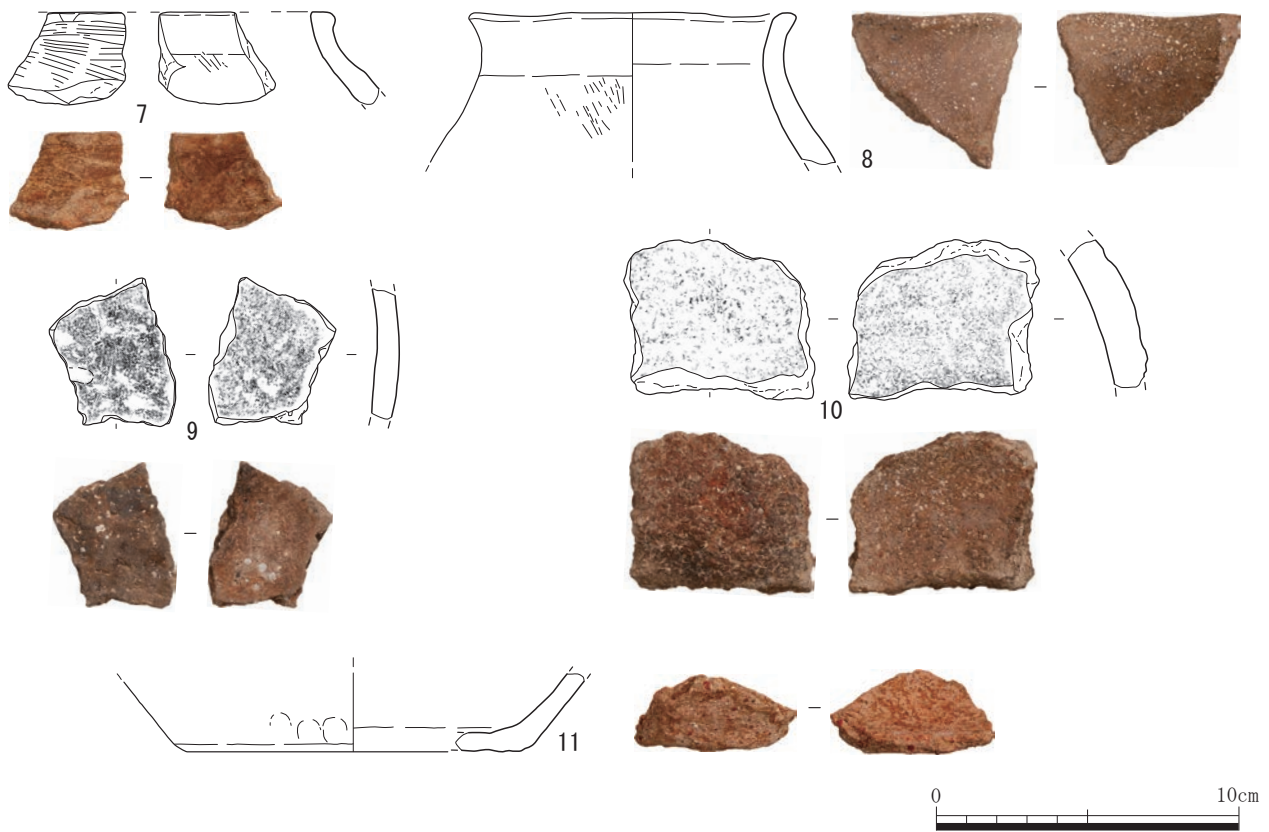
図 1 は口縁部資料で、破片下方に横方向の稜線のようなものが認められた。大当原式土器の特徴であろうか。図 2 は底部付近の資料で、尖底或いは乳房状となるものと思われる。こちらにも横方向の稜線があり、大当原式である可能性がある。図 3～6 はくびれ平底土器に比定される。図 3 は外側に開く口縁、図 4 は頸部で少し括れる口縁である。図 5・6 は底部資料で、図 6 の底径は小さい。図 7 はグスク土器の口縁部と思われる。内傾する口縁で、外面にヘラ状工具による調整痕を残す。図 8～11 は先島系土器と思われる。近世期の資料であろうか。

第 16 表 土器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	色調 (器面・胎土)、混入物	種類	実測 番号
第 29 図・ 図版 23	1	鉢	口	20.0 - -	平口縁。内外面に指頭痕。体部に横方向のにぶい稜。外面付着物あり。	赤褐色・黒褐色、砂粒微量	貝塚時代後期 大当原式?	実 22
	2	-	底	- - -	外面下方に指頭痕。内面に縦方向の調整痕。外面に横方向のにぶい稜。	褐色・にぶい褐色	貝塚時代後期 大当原式?	実 19
	3	鉢	口	- - -	口縁端部が僅かに膨らむ。内外面に指頭痕。摩滅。	明赤褐色・オリーブ黒色	くびれ平底土器	実 17
	4	甕	口	- - -	内面に横方向の刷毛目?	明赤褐色・にぶい黄褐色、砂粒・赤色粒	くびれ平底土器	実 24
	5	-	底	- - 5.1	内外面に指頭痕。摩滅。	赤褐色・暗赤褐色	くびれ平底土器	実 20
	6	-	底	- - 4.5	外面に指頭痕。摩滅。胎土に空隙が目立つが、重量感あり。	明赤褐色・黄灰色	くびれ平底土器	実 23
第 30 図・ 図版 24	7	壺?	口	- - -	内傾して立ち上がる。口縁端部が僅かに膨らむ。外面にヘラ状工具による横方向の調整痕。硬質感あり。	にぶい赤褐色・明黄褐色、白色粒	グスク土器	実 21
	8	壺	口	10.4 - -	口縁部横ナデ。肩部刷毛目。口縁部は僅かに波打つ。	にぶい黄褐色・にぶい黄橙色、白色粒多量・黒色粒	先島系土器	実 16
	9	-	胴	- - -	内外面ナデ。	にぶい黄褐色・明褐色、白色粒多量・黒色粒	先島系土器	実 14
	10	-	胴	- - -	内面ナデ。外面は粗い。非常に硬質。	にぶい赤褐色・明赤褐色、白色粒多量	先島系土器	実 18
	11	壺	底	- - 11.0	内面ナデ。外面は粗いが指頭痕あり。	にぶい橙色・灰褐色、赤・白色粒多量	先島系土器	実 15



第 29 図・図版 23 土器 1 (S=2/5)



第 30 図・図版 24 土器 2 (S=2/5)

(14) 円盤状製品

総数 64 点の資料が得られ、無孔の 63 点は素材・部位によって 6 分類できた (第 17 表)。点数が多いのは、甕や播鉢といった大型器種の陶器胴部を加工したもの (26 点)、青磁や白磁といった貿易陶磁の碗底部を加工したもの (19 点) である。

分類間での直径や重量の差異が大きいため、これら全ての用途が全く同じということは考えにくい。子供の遊具として考えた場合、北谷においては、①「甕 (カーミ) の破片を丸くして遊んだキリトゥンガシェー (石けり)」^{註1}、②「イトゥガヨー (おはじき) : 市販のガラス製のおはじきがない時は、陶器の破片や巻貝のふたなどを代わりに使っていた」^{註2} が伝わっており、大きいサイズのを①に、小さいサイズのを②に充てることができよう。

これらのうち、磁器の口縁部・胴部を素材としたもの 5 点と瓦を素材としたもの 1 点を図示・掲載した。磁器製のものは径 3 ~ 4cm のものが多い中、図 5 は約 2cm とかなり小さい。『平安山原A遺跡』(2016) では、戦前遺物としてガラス製のおはじきが 2 点紹介されているが、図 5 はこれらの規格に近いものであり、これらが一緒に使用された可能性も感じられる。瓦製のものには布目が残っていた。

この他、中央に穿孔される瓦素材のものを 1 点図示・掲載している (図 7)。断面に丸みが認められないため、瓦質の焔炉片を転用したのかもしれない。独楽 (こま) の用途が想定されている^{註3}。

註 1 旧字上勢頭郷友会 1998『上勢頭誌 下巻 長寿・人物編』

註 2 北谷町教育委員会 1996『北谷町の自然・歴史・文化』

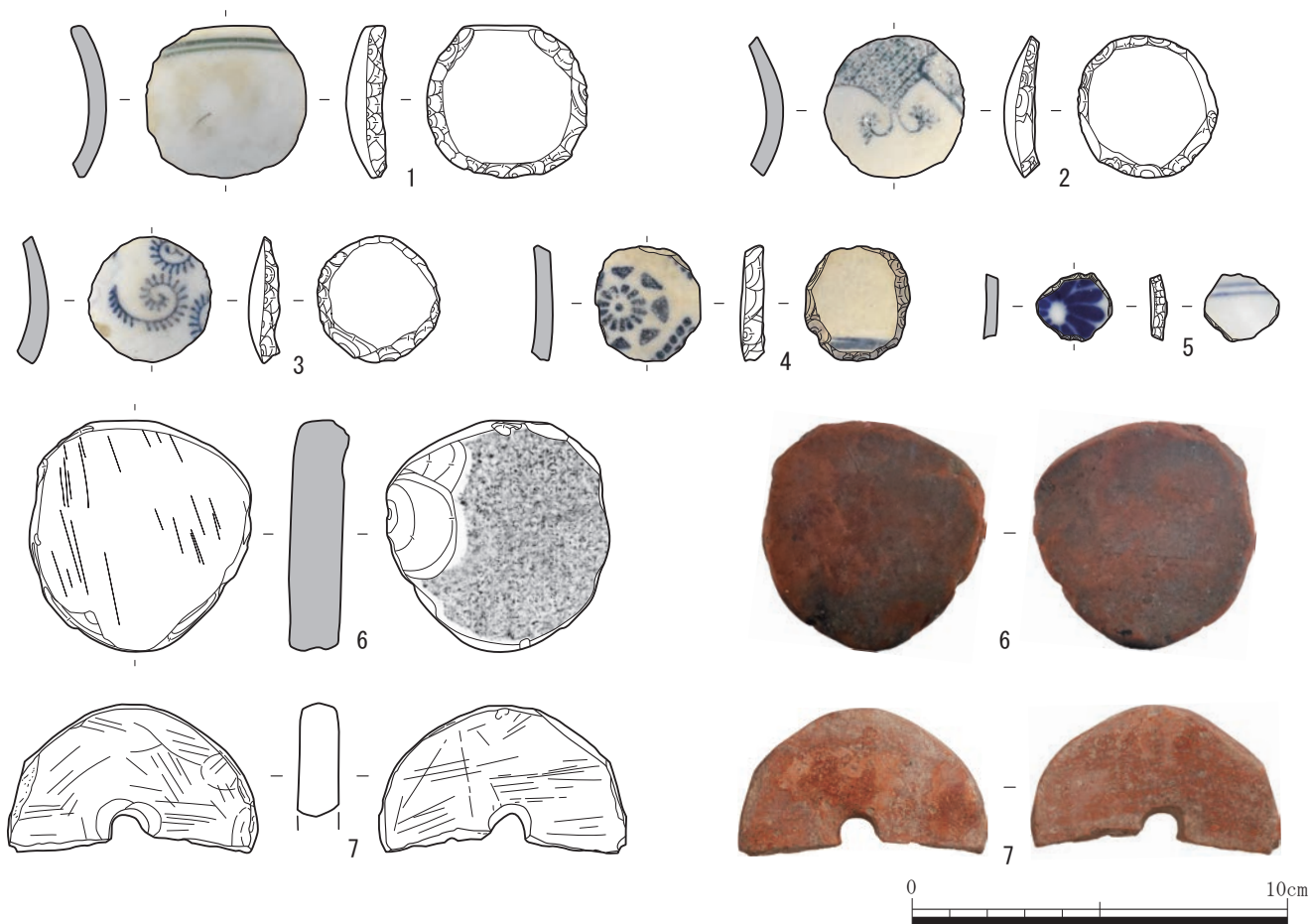
註 3 北谷町教育委員会 2016『平安山原A遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業 (平成 19・21・22・23 年度)』

第 17 表 無孔円盤状製品の素材・部位別点数

素材	貿易陶磁碗 高台付底部	赤瓦	大型陶器 胴部	くびれ平底 土器底部	本土産磁器 高台付底部	本土産磁器 口・胴部
点数	19	2	26	2	3	11
径の範囲 (cm)	約 5.5 ~ 8.0	約 6.0	約 3.5 ~ 6.5	約 4.5 ~ 5.0	約 3.5 ~ 5.5	約 2.0 ~ 4.0

第 18 表 円盤状製品観察一覧

第図 図版	図番号	素材・部位	最大径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察事項	実測 番号
第 31 図 ・ 図 版 25	1	磁器・口縁部	4.3	0.5	13.9	外面に口縁の圏線を残す。統制下の国民食器を利用。	実 183
	2	磁器・胴部	4.3	0.5	9.8	外面に文様を残す。	実 184
	3	磁器・胴部	3.4	0.5	7.7	外面に文様を残す。	実 185
	4	磁器・胴部	3.1	0.5	6.2	外面に文様、内面に圏線を残す。砥部焼碗を利用。	実 186
	5	磁器・胴部	2.0	0.3	1.6	外面に文様、内面に口縁の圏線を残す。	実 187
	6	瓦	6.1	1.3	58.3	内面に布目を残す。打ち欠き後、研磨。	実 182
	7	瓦質土器?	6.6	1.1	(34.5)	両側から穿孔。打ち欠き後、研磨(表裏面・側縁面)。	実 96



第 31 図・図版 25 円盤状製品 (S=1/2)

(15) 簪

得られた資料は、図示・掲載した 1 点のみであるが、平安山原 A 遺跡全体としては、これまで 29 点の簪が確認されている (第 38 集: 27 点、第 41 集: 1 点、本書: 1 点)。

図 1 は匙型の完品であるが、頭頸部境に損傷を受け、背面側に曲がっている。土壌改良のために用いられた石灰のせいなのか付着物が多く、素材が判然としないが、地色は黒味を帯びている。真鍮製であろうか。



第 32 図・図版 26 簪 (S=2/5)

第 19 表 簪観察一覧

第図 図版	図番号	分類	全長 (cm)	頭部幅 (cm)	頭長 (cm)	頭厚 (cm)	竿長 (cm)	竿厚 (cm)	重さ (g)	観察事項	実測 番号
第 32 図 図版 26	1	匙型	14.35	1.7 (長) 1.2 (短)	3.7	0.4 ~ 0.5 六角形	8.8	0.4 六角形	12.3	頭部が根元から背面側に曲がっている。石灰(?)の付着が激しい。	実 105

(16) 銭貨

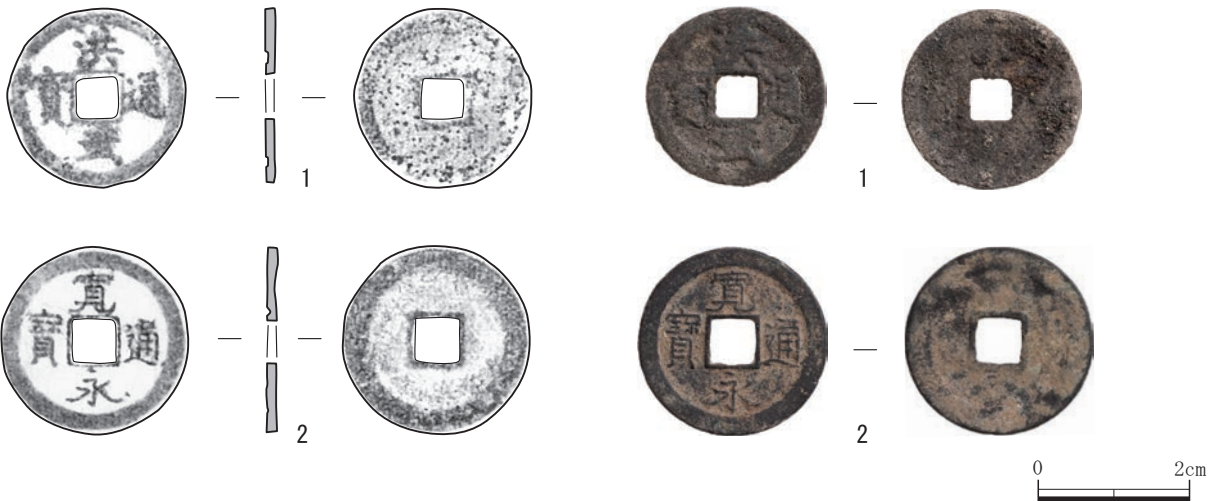
2 点の資料が得られ、いずれも等倍で図示・掲載した。

図 1 は洪武通宝（背なし）である。比較的掘りが深く、厚めである印象を受ける。中国銭としては、沖縄県内及び北谷町内で最も多く得られているものである。図 2 は寛永通宝（新寛永、背なし）である。

『平安山原A遺跡』（2016）においては、中国銭貨と寛永通宝の平面分布が大きく分かれることが示されているが、今回の調査区はこの両分布域の中間にあたっており、資料数は 2 点と少ないものの整合のとれた出土結果となった。

第 20 表 銭貨観察一覧

第図 図版	図番号	銭貨名	背文字	初铸造・国	残存	外径 (cm)	内径 (cm)	縁幅 (mm)	縁厚 (mm)	重量 (g)	観察	実測 番号	
第 33 図 図版 27	1	洪武通宝	なし	1368	明	完	2.3	0.55	2.0	1.5	3.3	縁（表裏）・字明瞭。厚みを感じられる。	実 101
	2	寛永通宝	なし		日本	完	2.45	0.6	2.0	1.0	3.3	縁（表）・字明瞭。新寛永。	実 102



第 33 図・図版 27 銭貨 (S=1/1)

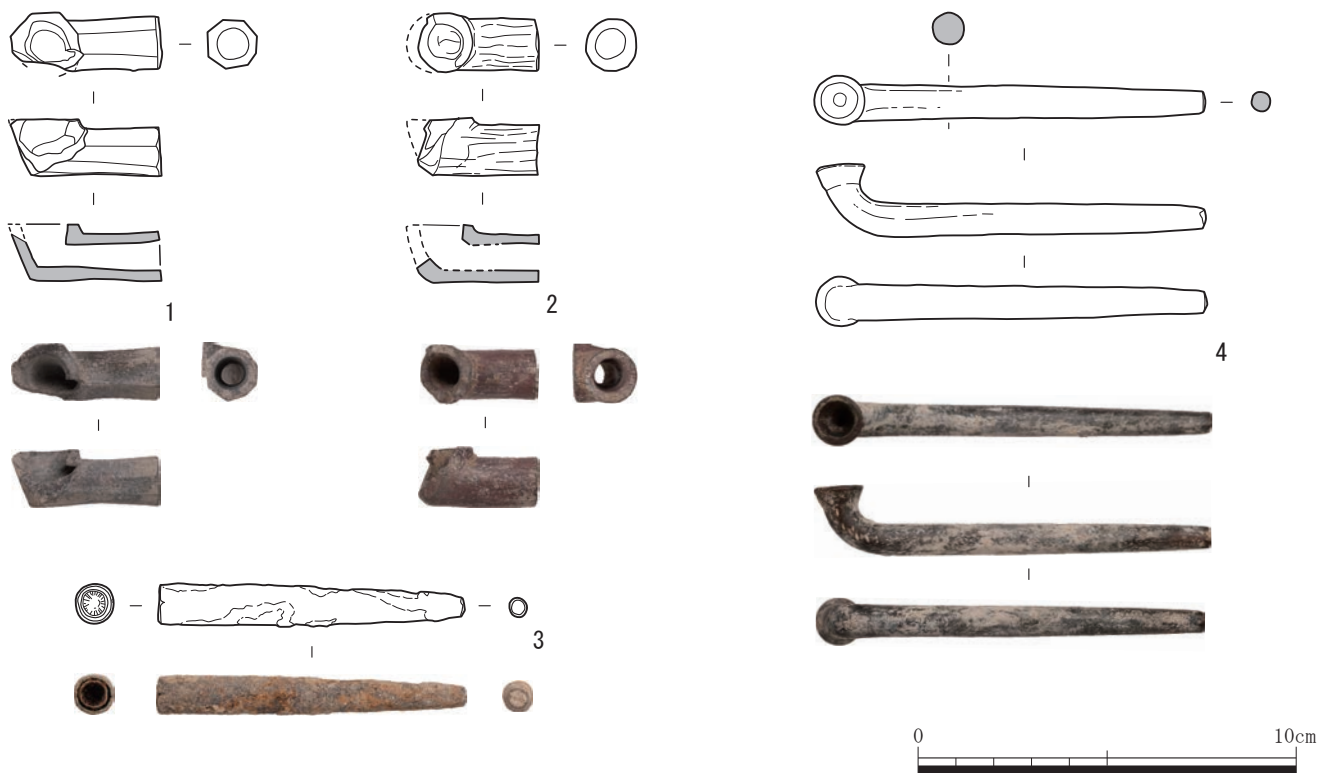
(17) 煙管（きせる）

総数 4 点の資料が得られた。

図 1・2 は陶製の雁首である。図 1 は、面取りにより火皿・小口ともに八角形を呈するものと思われるが、火皿は半欠している。図 2 は細かく面取りすることで断面を円形に仕上げている。こちらも火皿部分が半欠している。図 3 は金属製の吸口である。付着物が多いため、具体的な素材は不明である上、口付の孔も塞がっているが、小口内部には竹管らしきものが残存していた。図 4 は延べ煙管で、全長 10.35cm と短いものである。こちらも付着物が多いが、地色は黒味を帯びる。口付の孔も塞がっている。火皿部分はラッパ状をなす。

第 21 表 煙管観察一覧

第図 図版	図番号	器種	種類	素材	観察事項	長さ (cm)	火皿の 高さ (cm)	火皿 (cm)	胴径 (cm)	小口 (cm)	口付 (cm)	重さ (g)	実測 番号
第 34 図 ・ 図版 28	1	羅宇・雁首	陶製	沖縄産 無釉	火皿・小口は八角形。火皿は半欠。	4.0	1.5 (0.2)	外径 1.8 内径 1.1	-	外径 1.3 内径 0.8	-	6.4	実 99
	2	羅宇・雁首	陶製	沖縄産 無釉	火皿・小口は円形。火皿は半欠。	3.2	1.5 (0.2)	外径 1.55 内径 0.9	-	外径 1.3 内径 0.8	-	6.7	実 103
	3	羅宇・吸口	金属製	不明	内部に竹管（径 0.8cm）が残存。口付は泥・錆等で塞がる。	8.1	-	-	0.9	外径 1.0 内径 0.9	外径 0.5 内径 0.4	9.2	実 100
	4	延べ煙管	金属製	不明	火皿はラッパ状。口付は塞がる。	10.35	2.0 (0.7)	外径 1.3 内径 0.9	0.9	-	外径 0.5 内径不明	29.8	実 104



第 34 図・図版 28 煙管 (S=1/2)

(18) 滑石

2 点の資料が得られ、両方を図示・掲載した。

図 1 は表裏側の各面において摩滅しており、特に裏面と上側面ではそれが顕著である。人為的な削り或いは研磨の結果、湾入したと思われるが、何らかの形を目指しての加工という印象は受けない。粉末を得るための作業であろうか。図 2 はやや硬質な素材で、薄い板状を呈する。表裏面・上下側面に削り或いは研磨が認められ、下側面は僅かに湾入する。

第 22 表 滑石観察一覧

第図 図版	図番号	長×短×最大厚 (cm)	穿孔径 (cm)	重さ (g)	観察事項	実測 番号
第 35 図 図版 29	1	5.0 × 4.1 × 1.25	0.6	35.6	表裏に傷。各面に研磨痕、特に裏面と上側面に顕著。	実 92
	2	4.1 × 3.5 × 0.6	0.4	16.7	表裏に傷。表裏面・上下側面に研磨痕。やや硬質。	実 176



第 35 図・図版 29 滑石 (S=1/2)

(19) 硯 (すずり)

総数 9 点の資料が得られたが、石材はまちまちであった。これらのうち 2 点を図示・掲載した。

図 1 は石製の破片資料である。赤茶色を呈しており、裏面下方の凹面中央に何らかの細い線刻が認められる。縦書きで「…間関」とも読める。山口県西部の赤間関の名産「赤間硯」と考えられ、首里城跡・湧田古窯跡・名護市溝原貝塚でも同様の資料が確認されている。「江戸時代後半に何人かの無名の硯師をかかえる硯屋が大量生産させた硯に一括して刻んだもの」(今帰仁村教育委員会、2010) とされる。

図 2 は樹脂製と思われる、近代の量産品である。墨池は左側の摩耗が進んでおり、全体に細かいひび割れが認められる。裏面にある長方形の凹部に、「登録商標」・ロゴマーク及び「ミササ硯」が陽刻されており、同一のものが浦添市内間西原近世墓群から出土している。「ミササ」が「三朝」であれば鳥取の地名、「三篠」であれば広島の地名、「三笹」であれば山口県の地名にある。近世～近代における島外からの硯の移入を考える上での好資料であろう。

第 23 表 硯観察一覧

第図 図版	図番号	残存状態	色調	素材	長×短×厚 (cm)	観察事項	実測 番号
第 36 図 図版 30	1	破損	赤茶色	赤間石	(11.2) × 6.2 × 1.65	墨堂に線刻傷。背面下方に凹面を持ち、その中央に文字が線刻される。	実 177
	2	完	黒色	樹脂?	12.0 × 6.0 × 1.5	墨池左側が摩耗。全体に細かいひび割れ。背面凹部に「ミササ硯」等の陽刻。軽量。	実 98



第 36 図・図版 30 硯 (S=2/5)

(20) 石器

総数 37 点の資料が得られた。うち 27 点が砥石を含めた敲磨器類であり、石斧が 6 点とこれに続く。これらのうち 9 点を図示・掲載した。

図 1～3 は石斧である。図 1・2 は刃部側だけが残存する資料であるが、ほぼ全面にわたって研磨されている。図 3 は刃部付近のみを研磨した局部磨製石斧で、2 面にわたって自然面を残す。図 4～9 は敲磨器及び砥石で、2 つの機能を兼ねたものが目立つ。図 7 には穿孔がなされており、携帯用の石器であったことが推定できる。

第 24 表 石器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	残存	石材	縦×横×厚 (cm)	重さ (g)	観察事項	実測 番号
第 37 図 ・ 図 版 31	1	石斧	破損	粘板岩	(5.4) × 5.1 × 1.35	67	磨製石斧。基部破損。片刃に近い。	実 142
	2	石斧	破損	緑色片岩	(5.3) × 6.8 × 1.4	68	扁平磨製石斧。刃部付近のみ残存。	実 144
	3	石斧	完	緑色片岩	8.8 × 5.3 × 2.0	135	局部磨製石斧。刃部は使用による摩滅が著しい。	実 141
	4	敲石	破損	結晶片岩	(6.0) × 3.1 × 2.7	86	棒状。片方の端部を破損。先端に敲打痕。側面は敲打により調整。	実 143
第 38 図 ・ 図 版 32	5	敲・磨石	破損	砂岩	(12.3) × 7.9 × 5.2	911	片方の端部を破損。先端に敲打痕。側面全体に磨痕。	実 147
	6	敲・凹石	完	安山岩?	10.4 × 8.7 × 5.9	820	表裏に凹み。4 側面に敲打痕。石材は砂岩系の可能性あり。	実 148
	7	敲・砥石	完	凝灰質安山岩	9.0 × 6.8 × 5.6	486	上側面～表面に穿孔。表面と 2 側面に敲打痕。全平坦面が砥面。携帯用か。	実 146
第 39 図 ・ 図 版 33	8	砥石	破損	砂岩	4.8 × (5.3) × 3.0	68	小型。破断後に破断面を軽く研磨して使用を継続。	実 145
	9	砥石	完	泥岩	11.7 × 4.4 × 1.8	154	延板状。所々にガジリ痕。	実 140



第 37 図・図版 31 石器 1 (S=1/3)

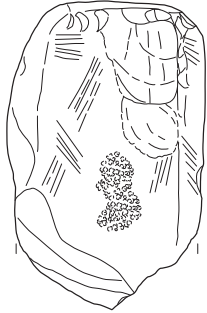




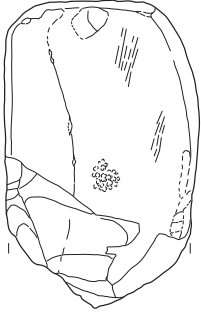
1



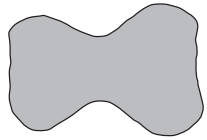
1



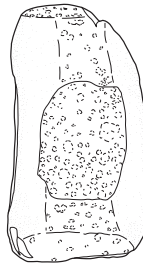
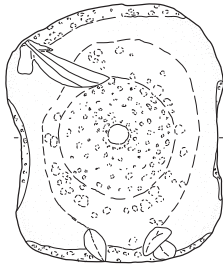
5



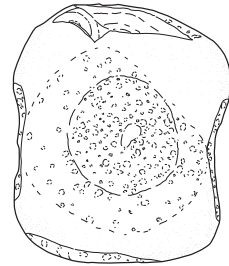
5



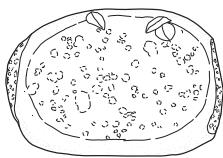
1



6



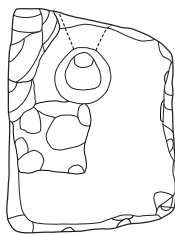
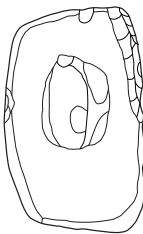
6



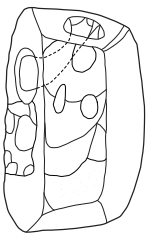
1



1



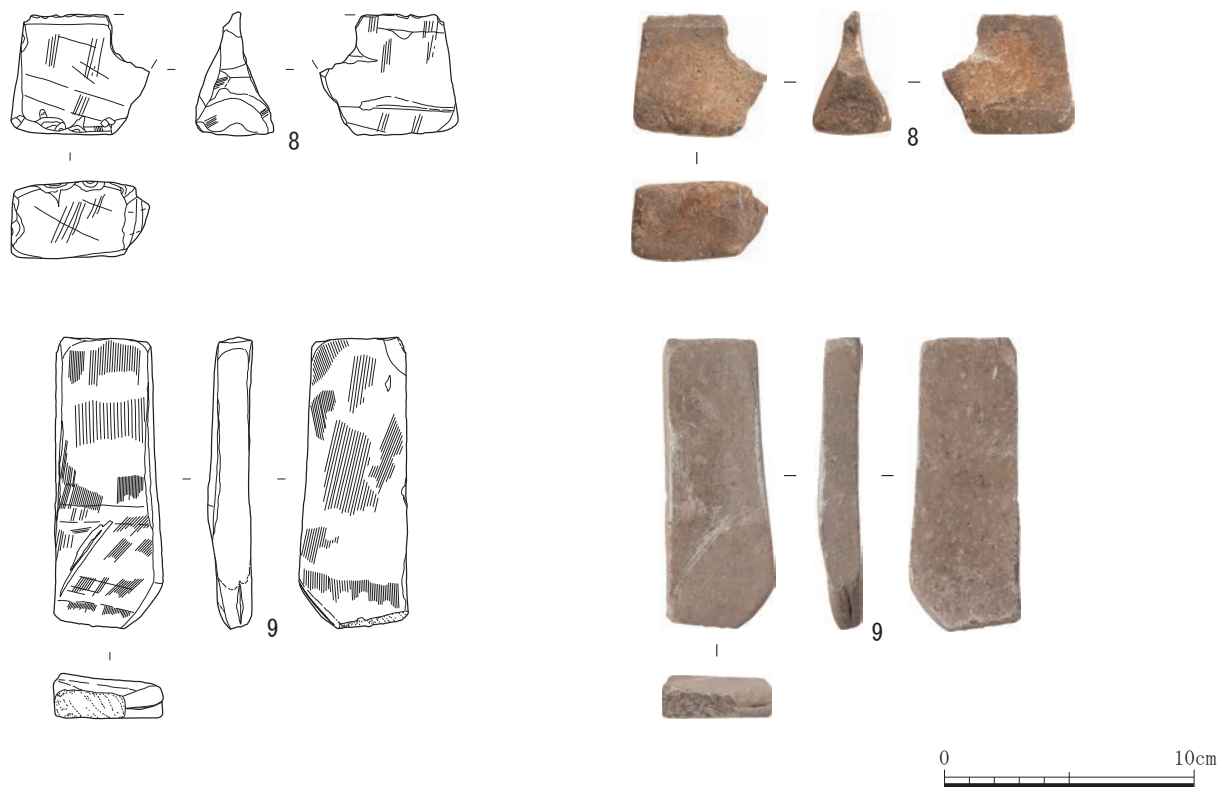
7



7



第 38 图 · 图版 32 石器 2 (S=1/3)



第 39 図・図版 33 石器 3 (S=1/3)

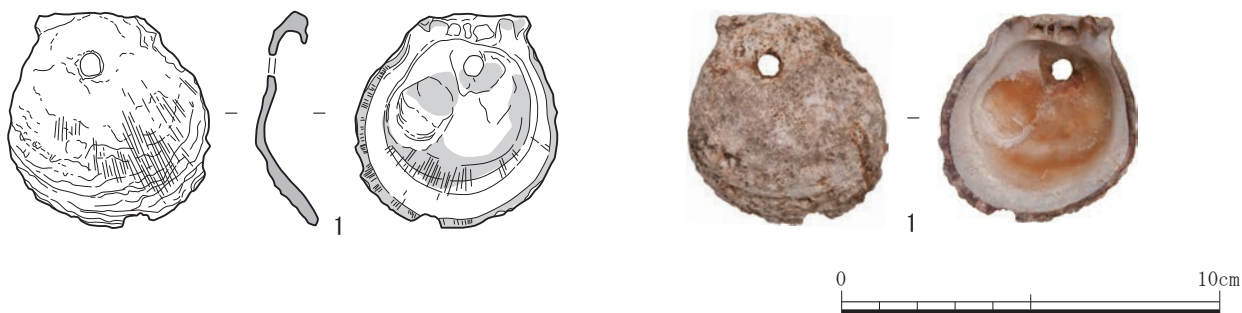
(21) 貝・貝製品

遺物採取作業からは大量の自然貝が得られたが、予めその殆どを計量の対象から除外している。特に有意なものとして、2点選抜し、図示・掲載した。

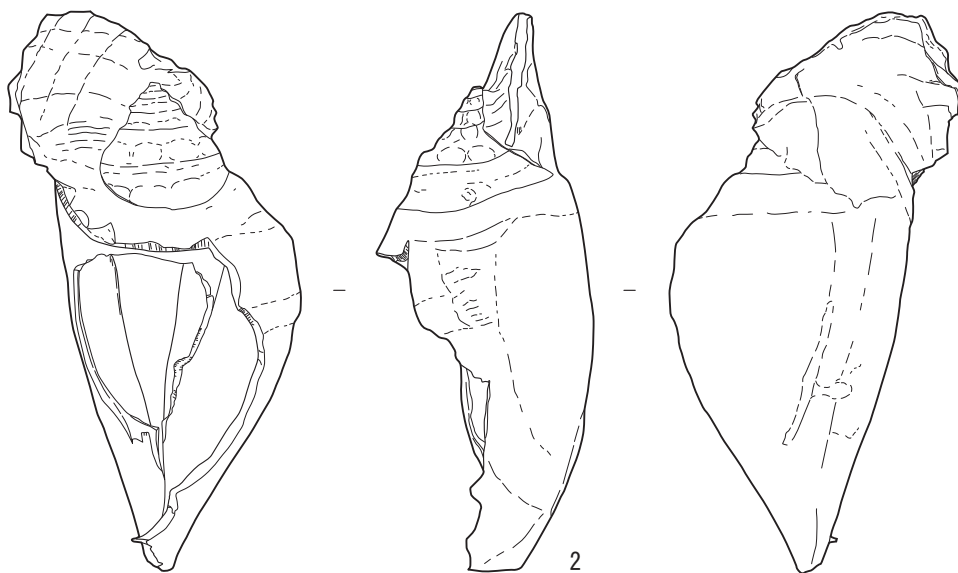
図1はメンガイ類製の有孔貝錘である。風化により棘上突起はほぼ消失しているが、内面の色は残っている。上方のほぼ中央に径5mmの孔を持ち、これは外面からの穿孔である。重さは28.1gで、これまで平安山原A遺跡で得られたメンガイ類製貝錘の中では、やや大型に属する。 図2は背面と袖部を大きく欠失したゴホウラである。貝輪素材に適した成貝であり、腹面はほぼ無傷である。死貝の証左となる「アバタ」は認められず、生貝として持ち込まれ食用となったものである可能性が考えられる。

第 25 表 貝・貝製品観察一覧

第図 図版	図番号	貝種	内容	大きさ (cm)	重さ (g)	観察事項	実測 番号
第 40 図 図版 34	1	メンガイ類	貝錘	殻高 5.7 × 殻長 5.35	28.1	右殻上方中央に径 5mm の孔。穿孔方向は外→内。	実 97
第 41 図 図版 35	2	ゴホウラ	貝輪素材?	殻高 14.7	237.1	背面と袖部を欠失。アバタなし。	実 71



第 40 図・図版 34 貝・貝製品 1 (S=1/2)



第 41 図・図版 35 貝・貝製品 2 (S=1/2)

第IV章 まとめ

今回の報告は、桑江伊平地区原状回復事業に伴う平安山原A遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。調査対象地区は米軍基地として使用されていた時期に土壤汚染が進行していたため、発掘調査に際しては調査員の安全確保のため人力による掘削ではなく、土壤改良土からの遺物採取を行うという方法で調査を実施した。そのため通常の発掘調査のように出土位置情報、遺構の記録等を行うことはできなかった。

しかし資料整理作業の結果、出土遺物は集計対象だけでも9,000点を超え、近現代から近世・グスク時代・貝塚時代後期と時代幅のある遺物が得られた。近現代の遺物が多量に出土した傾向については、調査対象地区に戦前の平安山集落の一部が含まれていることが要因として挙げられる。土器や中国産陶磁器等の古い時期の遺物出土状況については、近現代の遺物の出土量と比較すると割合としては少なくなるが、調査区が一部重複する『平安山原A遺跡』(2016)で報告された遺物の出土傾向と類似している。これらの成果は既刊である報告書の内容とも整合するものであり、遺跡の各期の変遷について、これまでの調査結果を更に補完するものである。

赤間硯について

今回注目される遺物として、赤間石製硯と推定された資料が挙げられる。これは石質による同定ではなく、背面の線刻が類例資料に酷似していたことが推定根拠の決め手になったのであり、この線刻に気付かなければ、従前通り単に赤色頁岩製の硯として済まされていたかもしれない。従って、これまで出土・報告されていた資料の中に、同様のものが含まれている可能性が考えられたため、同一遺跡である平安山原A遺跡出土資料のうち、『平安山原A遺跡』(2016)で取り扱われたものを再検討した。

目視による印象でしかないが、これまで赤色頁岩製とされてきたものの中から、今回資料に酷似する資料(赤茶～赤紫色を呈する)は4点確認された。加えて今回の集計対象遺物の中からも、別に1点得られている(第26表)。それぞれの硯幅や縁幅が異なるため、同一規格のものとは言えないが、うち2点には今回資料との形態的共通点も認められた。それは背面にも凹部を有するという点である。他の石材でも背面に凹部を有するものは多くあるが、凹部の隅が表面同様に角張っている点で全く異なっている。推定赤間石グループの背面凹部は、表面とは異なって隅が丸い「隅丸方形」を呈し、窪み方も緩やかである。今回見つかった線刻はこの凹部中央に施されているため、凹部自体が消費地での二次的な加工ではない可能性は高い。

4点のうち他の2点には、背面の凹部自体が存在していないため、一概に断ずる訳にはいかないが、今後このような形態の硯が得られた場合、留意すべき着眼点として認識することに損はないように思われる。

第26表 赤間石製であることが疑われる出土硯一覧

	ID	報告	規格 (cm)				残存部		背面		備考
			長	幅	厚	縁幅	部位	重さ (g)	凹部	線刻	
1	第36図-1	今回	-	6.2	1.65	0.3	墨堂側	175.6	隅丸	あり	実177
2	-	今回	-	-	-	0.3	墨堂側	10.0	-	-	集計対象資料
3	台1361	2016年	-	5.4	1.7	0.3	墨堂側	101.9	隅丸	あり?	
4	台362	2016年	-	-	-	0.3	墨堂側	49.7	隅丸	-	
5	台703	2016年	-	-	-	0.9	墨池側?	27.8	なし	なし	
6	台975	2016年	-	7.2	-	0.45	墨堂側	188.8	なし	あり?	

滑石の出土状況について

本遺跡と同じキャンプ桑江北側返還地に所在し、伊平地区の南側に位置する字桑江の小堀原遺跡・後兼久原遺跡からは、600点を超える大量の滑石製品が得られている。沖縄県内では突出した規模であり、これら両遺跡から直近ともいえる周辺遺跡とは明瞭な差異が認められているため、当時の北谷、とりわけ字桑江が滑石流入の拠点の1つとみなすことは難しくない。滑石の分割がどの段階で、或いはどこで行われたかの推測は容易ではないが、その一助とするために沖縄県内の滑石出土遺跡における点数の集成を試みた。

県内出土滑石の集成については宮城弘樹氏の論考(宮城2016)に詳しいが、北谷町教育委員会が所蔵している文化財調査報告書を参考にした結果、若干の遺漏や点数の異同、近刊の追加があった。この宮城氏集成との相違点を明確に

するために、第27表ではその数字を太字で示している。ただし、北谷町教育委員会が所蔵していない文献については、時間の制約上、宮城氏の集計点数をそのまま採用した。

筆者集計の結果、宮城氏のそれを100点ほど上回る1,138点の滑石資料を確認できた。北谷町からは670点の出土が確認されており、県内全体の約60%を占める。次いで多いのが那覇市の198点であるが、このうちヒヤジョー毛遺跡が103点、銘苅原遺跡78点と、これら2遺跡で9割以上を占めている。特にヒヤジョー毛遺跡では99点が小片であると報告されているので、滑石が小片に至る行為、例えば再加工や粉碎といったことが積極的に行われていたとも捉えることができる。北谷の周辺市町村で目立つのは南接する宜野湾市の103点であり、伊佐前原第一遺跡に54点と約半数が集中している様子も看取される。

第27表-1 沖縄県内における滑石出土の報告状況

市町村	集号	刊行年	書名	今回の 集成	宮城氏 集成	備考
今帰仁村	今帰仁村 26	2009	今帰仁城跡発掘調査報告書IV	1	1	
名護市	名護市 18	2007	屋部前田原遺跡	6	6	文献未確認
宜野座村	宜野座村 9	1990	漢那ウェーヌアタイ遺跡	1	1	
恩納村	沖縄県 23	1979	恩納村熱田貝塚発掘調査報告書	14	14	
	恩納村 12	2013	山田グスク	2	2	
うるま市	沖縄県 125	1996	平敷屋トウバル遺跡	6	6	
	石川市 5	2003	伊波城跡	1	1	文献未確認
	石川市 6	2004	伊波丘陵周辺遺跡分布調査	1	1	
	勝連町 11	1990	勝連城跡	5	-	
			(勝連城跡)	4	4	宮城氏実見
	うるま市 4	2006	具志川グスク I	1	1	
	うるま市 15	2011	東恩納ノロ殿内遺跡	8	6	
読谷村			(ウガンヒラー北方遺跡)	3	3	宮城氏実見
嘉手納町	嘉手納町 2	1995	嘉手納町の遺跡	4	4	文献未確認
沖縄市	沖縄市 4	1982	沖縄市の埋蔵文化財	1	1	大里ユーマヤ遺跡
北谷町	沖縄県 81	1987	北谷町砂辺サーク原遺跡	16	16	
	センター 22	2004	後兼久原遺跡	26	26	
	北谷町 21	2003	後兼久原遺跡	89	89	
	北谷町 28	2008	伊礼原D遺跡	1	1	
	北谷町 30	2009	小堀原遺跡	53	53	
	北谷町 32	2010	北谷城	1	-	
	北谷町 34	2012	小堀原遺跡	473	439	
	北谷町 36	2014	伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原A遺跡	3	-	全て小堀原遺跡
	北谷町 38	2016	平安山原A遺跡	1	-	
	北谷町 40	2016	平安山原B・C遺跡	2	-	
	北谷町 41	2017	伊礼原D遺跡	2	-	
	北谷町 42	2018	千原遺跡	1	-	
	北谷町 43	2018	平安山原A遺跡	2	-	
宜野湾市	沖縄県 105	1992	安仁屋トゥンヤマ遺跡	5	5	
	沖縄県 134	1999	喜友名貝塚・喜友名グスク	4	4	
	センター 4	2001	伊佐前原第一遺跡	54	54	
	センター 35	2006	新城下原第二遺跡	1	1	
	センター 79	2015	キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書2	1	1	
	宜野湾市 5	1984	喜友名遺跡群	4	4	
	宜野湾市 10	1989	土に埋もれた宜野湾	2	2	
	宜野湾市 17	1993	伊佐前原遺跡	1	1	
	宜野湾市 18	1998	真志喜森川原遺跡	4	4	文献未確認
	宜野湾市 27	1998	都市計画街路大謝名・真志喜線建設工事関係埋蔵文化財緊急発掘調査概報	14	14	
	宜野湾市 28	1998	伊佐前原第一・第二	3	1	
	宜野湾市 40	2007	喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群 喜友名前原第一古墓群	1	-	
宜野湾市 49	2012	大山前門原第一遺跡	1	-		
宜野湾市 52	2017	瑞慶覧基地内病院地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書2	8	-		
西原町	西原町 5	1983	我謝遺跡	9	9	
浦添市	沖縄県 65	1985	牧港貝塚・真久原遺跡	2	2	
	浦添市 26	1997	真久原遺跡	1	-	
	浦添市	2005	浦添原遺跡	3	-	
	浦添市	2007	仲間後原遺跡・仲間あさと原の印部土手	2	-	
	浦添市	2009	浦添城跡	1	1	文献未確認

第 27 表 -2 沖縄県内における滑石出土の報告状況

市町村	集号	刊行年	書名	今回の 集成	宮城氏 集成	備考
那覇市	センター 8	2002	天界寺跡 (II)	11	-	
	那覇市 26	1994	ヒヤジョー毛遺跡	103	103	
	那覇市 34	1997	識名シーマ御嶽遺跡	3	2	
	那覇市 35	1997	銘苺原遺跡	78	78	
	那覇市 53	2002	銘苺原遺跡	1	1	文献未確認
	那覇市 54	2002	銘苺原南遺跡	1	1	
	那覇市 57	2003	銘苺直禄原遺跡	1	1	
豊見城市	豊見城村 2	1987	伊良波東遺跡	29	29	
	豊見城村 4	1990	高嶺古島遺跡	1	1	
	豊見城村 5	1983	渡嘉敷後原遺跡群	7	7	
	豊見城市 6	2003	宜保アガリス御嶽	5	5	
南風原町	南風原町 2	1996	クニンドー遺跡	1	-	
	南風原町 4	2005	津嘉山古島遺跡・仲間村跡 A 地点・仲間村跡 B 地点・津嘉山クボー遺跡	3	2	
	南風原町 5	2005	クニンドー遺跡 (II)	1	-	
南城市	沖縄県 50	1983	稲福遺跡発掘調査報告書	1	1	
	玉城村 1	1991	糸数城跡	1	1	
	佐敷町	1980	佐敷グスク	3	3	
	佐敷町 2	2000	佐敷町の文化財	1	-	佐敷下代原遺跡出土
	佐敷町 3	2001	佐敷下代原遺跡	16	6	
	南城市 1	2006	佐敷上グスクほか範囲確認調査報告書	1	-	
八重瀬町	八重瀬町 1	2008	世名城古島遺跡	1	1	
	八重瀬町 2	2012	志多伯遺跡	10	-	
	具志頭村 3	1986	具志頭村の遺跡	1	1	
糸満市	糸満市 21	2007	大里前原遺跡	1	-	
粟国村	粟国村 2	2000	西御願貝塚ほか発掘調査報告書	1	-	
久米島町	具志川村 2	1994	具志川村の遺跡	1	1	ヤジャーガマ洞穴出土
宮古島市	沖縄県 94	1990	宮古諸島	1	1	箕島遺跡出土
	平良市 4	1999	住屋遺跡 (I)	1	1	
	センター 7	2002	新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡	1	2	
竹富町	沖縄県 74	1986	下田原貝塚・大泊浜貝塚	1	1	
	沖縄県 97	1990	新里村遺跡	1	1	
	沖縄県 131	1997	慶来慶田城遺跡	1	1	
合計				1138	1029	

また、北谷町の遺跡報告書に記載されている資料について、体積の簡易計測（長×短×厚）を行い、遺跡別の滑石の大きさを示したのが第 28 表である。報告書に掲載されない資料に小片が多いことは十分に考えられるため、これらを除外したこの計算結果は各遺跡における平均値にはなり得ない。しかし、体積の大きな資料が出土していなければ数値が大きくなることも事実であり、数値が大きいくほど分割前の資料が存在している蓋然性があるものとして、これを示した。本来であれば、全ての資料の重量から算出すべき作業であることは言うまでもない。

第 28 表 北谷町における遺跡ごとの滑石出土状況

遺跡名	出土点数	出土比率	計測 (掲載) 点数	平均体積 (cm ³)
小堀原遺跡	529	79.0%	77	46.4
後兼久原遺跡	115	17.2%	26	46.6
砂辺サーク原遺跡	16	2.4%	8	15.2
伊礼原D遺跡	3	0.4%	3	31.9
平安山原A遺跡	3	0.4%	3	13.2
平安山原C遺跡	2	0.3%	2	2.5
千原遺跡	1	0.1%	1	65.2
北谷城	1	0.1%	1	1.4
合計	670	100.0%	121	

この作業の結果、やはり小堀原遺跡・後兼久原遺跡における点数・体積がともに突出していることが分かる。キャンプ桑江北側返還地における発掘調査は、広大な面積を大々的に行ったものである。悉皆とも言える調査を実施したはずの伊礼原・平安山原地域からの滑石出土がこれほど少ない

というのは、翻って小堀原遺跡・後兼久原遺跡が示す数値の必然をよく示している。また、大規模グスクとして知られる北谷城に至っては、未だ 1 点の出土を確認したのみであり、滑石交易の盛期において北谷城は富が集中する場ではなかったと考える方が自然であろう。

参考・引用文献

書名・稿名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『北谷町の遺跡』	1994	北谷町文化財調査報告書第14集	全般
『後兼久原遺跡』	2003	北谷町文化財調査報告書第21集	全般
『北谷町の地名』	2006	北谷町文化財調査報告書第24集	全般
『伊礼原D遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第28集	全般
『小堀原遺跡』	2009	北谷町文化財調査報告書第30集	全般
『北谷城』	2010	北谷町文化財調査報告書第32集	全般
『小堀原遺跡』	2012	北谷町文化財調査報告書第34集	全般
『伊礼原D遺跡』	2013	北谷町文化財調査報告書第35集	全般
『伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡』	2014	北谷町文化財調査報告書第36集	全般
『平安山原B遺跡』	2015	北谷町文化財調査報告書第37集	全般
『平安山原A遺跡』	2016	北谷町文化財調査報告書第38集	全般
『平安山原B・C遺跡』	2016	北谷町文化財調査報告書第40集	全般
『伊礼原D遺跡』	2017	北谷町文化財調査報告書第41集	全般
『千原遺跡』	2018	北谷町文化財調査報告書第42集	全般
『沖縄のやきもの』	1998	佐賀県立九州陶磁器文化館	沖縄産陶器
『潮原古墓群』	2007	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第43集	沖縄産陶器
『市内遺跡発掘調査報告書(1)』	2007	浦添市文化財調査研究報告書	沖縄産陶器
『湧田古窯跡Ⅱ』	1995	沖縄県文化財調査報告書第121集	瓦質土器他
「沖縄の遺跡から出土する近代磁器－浦添の遺跡を中心に－」	1994	下地安広 / 南島考古第14号	本土産陶磁器
「中国・本土産陶磁器等の組成から見た16～17世紀の沖縄」	2009	瀬戸哲也 / 沖縄考古学会 / 考古学からみた薩摩の侵攻400年	本土産陶磁器他
「印判手のわん・さら・はち 平成18年度テーマ展」	2006	愛媛県立歴史文化博物館	本土産陶磁器
『天界寺跡(Ⅰ)』	2001	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集	本土産陶磁器他
『湧田古窯跡(Ⅰ)』	1993	沖縄県文化財調査報告書第111集	染付
『嘉田地区古墓群』	2004	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第21集	染付他
『渡地村跡』	2007	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集	染付
「14～16世紀の白磁の分類と編年」	1982	森田勉・横田賢次郎 / 日本貿易陶磁研究会 / 貿易陶磁研究 No. 2	白磁
『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』	1998	那覇市立壺屋焼物博物館	白磁他
『琉球出土陶磁社会史研究』	2011	吉岡康暢・門上秀敏 / 真陽社	白磁
「豊見城村確認の明代三彩鶴型水注」	1990	金城亀信 / 沖縄県教育委員会 / 文化課紀要第6号	輸入陶磁器
「琉球諸島出土の明代華南緑釉・三彩陶器について」	2004	上原恵 / 南島考古 No. 23	輸入陶磁器
「久米島伝世の華南三彩陶(下)」	2014	木村幾多郎 / 南島考古 No. 33	輸入陶磁器
『阿波根古島遺跡』	1990	沖縄県文化財調査報告書第96集	輸入陶磁器
『垣花村跡』	2009	那覇市文化財調査報告書第78集	輸入陶磁器他
『陶磁器が語るグスク時代の酒器』『琉球・東アジアの人と文化 上』	2000	金武正紀 / 高宮廣衛先生古希喜念論集刊行会	褐釉陶器
『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－』	1998	沖縄県文化財調査報告書第132集	褐釉陶器
『部瀬名貝塚』	2001	名護市文化財調査報告書第14集	褐釉陶器
『北谷町の自然・歴史・文化』	1996	北谷町教育委員会	円盤状製品
『上勢頭誌 下巻 長寿・人物編』	1998	旧上勢頭郷友会	円盤状製品
『崇元寺跡』	1983	那覇市文化財調査報告書第9集	円盤状製品
「グスク時代初期における出土滑石からみた集団関係」	2016	宮城弘樹 / 『南島文化』第38号	滑石
『恩納村熱田貝塚発掘調査報告書』	1979	沖縄県文化財調査報告書第23集	滑石
『砂辺サーク原遺跡』	1987	沖縄県文化財調査報告書第81集	滑石
『後兼久原遺跡』	2004	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第22集	滑石
『伊良波東遺跡』	1987	豊見城村文化財調査報告書第2集	滑石
「企画展 掘り出された硯」	2010	今帰仁村教育委員会	硯
『硯の辞典』	1984	藤木正次編 / 秋山書店	硯
『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書Ⅰ』	2001	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集	硯
『内間遺跡・内間カンジャータマ遺跡・内間西原近世墓群Ⅲ』	2004	浦添市文化財調査研究報告書	硯
『溝原貝塚』	1989	名護市文化財調査報告9集	硯

北谷町文化財調査報告書 第43集

は ん ざ ん ば る
平安山原A遺跡

— 桑江伊平地区原状回復事業に伴う発掘調査事業（平成22年度） —

編集：北谷町教育委員会

発行年：2018年（平成30年）9月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098 - 936 - 3159

印刷：文進印刷株式会社

〒901-0416 沖縄県八重瀬町字宜次706-4

TEL 098 - 996 - 3356



北 谷 町